ロシア語

一　ロシア語の黎明期

わが国とロシアとの関係を語る時、忘れてならないのが、漂流民の役割である。運命の悪戯で、ロシア領のアリューシャン列島やカムチャッカ半島に漂着した日本人の数は夥しい。ロシア側ではピョートル大帝の命により、漂流民保護の政策が十八世紀初頭よりとられ、日本におけるロシア語教育が始まるよりはるか以前に、漂流民による日本語教育がなされていたことは銘記されるべきだろう。

これにたいしわが国で本格的なロシア語の研究がはじまるのは、一八〇四（文化元）年から一八一一（文化八）年の間に、ロシア使節によってもたらされたロシア語、満州語の公文書の翻訳が必要になった幕府の命令による。蘭語通詞の馬場左十郎は一八一三（文化十）年江戸に呼び出され、足立左内、村上貞助、上原熊次郎らとともに、箱館に赴き、当時松前藩に幽囚されていたゴロヴニン（一七七六―一八三一、その著『日本幽囚記』は各国語に翻訳され、欧米人の日本認識を大きく変化させた）について、ロシア語の学習をはじめた。

その成果として馬場は『我羅斯語小成』、『魯文法規範』を、足立は『魯西亜辞書』を著している。また仙台藩の藩校養賢堂では蘭学局に魯西亜学和解方を置き、一八七一年までロシア語の授業が行われており、ほかにも幕末からロ

シア軍艦が寄港先にしていた長崎の稲佐では、住民の多くがロシア語を解し、海軍士官について本格的にロシア語を学び、志賀浦太郎のように通詞になった人物もいる。この伝統を受けて、幕府直轄の済美館では、一八六五年に英、仏、漢、蘭語、洋算とならんで魯語の教授がはじまっている。

この済美館とは一八六三年開設の英語所（語学所、洋学所と改名）が再改名したもので、この時から英語、蘭語にロシア語が教科目に加えられたのである。この学校は一八六八（明治元）年、長崎府所属となり、広運館と再度改名される。

市川文吉

遣魯留学生と市川文吉

一八六五年に魯語が加えられたことは、この年はじめて幕府派遣の遣魯留学生が送り込まれたことと無縁ではないだろう。慶応元年のこの六名の留学生の筆頭格は、蕃書調所教授職で、日本におけるドイツ学の草分けとされる市川兼恭（斎宮）の長男で、同じく十三歳から蕃書調所でフランス語を学びはじめ、一八六四年には教授手伝並当分助となっていた市川文吉（当時十八歳）である。彼はかのプチャーチン提督（日本から戻った彼は文部大臣に転進していた）の家に寄寓し、文豪ゴンチャローフにロシア語を学び、滞露八年、一八七三（明治六）年岩倉使節団とともに帰国、東京外国語学校魯語科の初代主任教諭となる人物である。

なおこの遣魯留学生の顔ぶれは、開成所の生徒四名、すなわち緒方城次郎（二十一歳）、大築彦五郎（十五歳）、田中次郎（十四歳）、小沢清次郎（十二歳）、それに世話役として、箱館奉行所の山内作左衛門（二十九歳）が同行した。なお最初の遣魯留学生については、山内の縁戚に当たる内藤遂による先駆的な労作『遣露伝習生始末』（東洋堂、一九四三年）がある。この著作は山内自身の日記や書簡をもとに書かれているので、当時のロシアの状況、それに対する留学生たちの反応も具体的に記されていて、今日では第一級の資料となっている。詳細は省くが、市川文吉を除いて、この留学生派遣は効果をあげなかった。その第一の理由は、留学生がロシアの後進性に失望したとされている。さらに学生の風紀の乱れを嘆じているくだりは興味深い。「……学校中稽古人みなあしく候間よき事は覚え申間敷、旁々学校之師之傍に栖居候方よろしからんとの事に御座候……」（前掲書、二六一ページ）

折しも露都ペテルブルグでは、皇帝狙撃事件（カラコーゾフ事件）が起こっており、ドストエフスキーの長編『罪と罰』が発表された年（一八六六年）でもあり、世情は騒然としていた。当時英国留学中の薩摩藩士森有礼が夏期休暇を利用して露都を訪れるのもこの年である。山内と意気投合した森は、その著『航魯紀行』に、ロシアの後進性、ロシア語の修得が困難であるにもかかわらず効用が少ないため留学生たちが後悔していることを明記している。森のこうしたロシア認識が、一八八五（明治十八）年の旧外語廃校劇の遠因となっていることは、内藤によっても指摘されてきたところである。

ニコライ露学校の役割

これ以外にロシア語教育という点で注目すべきなのが、宣教師ニコライ（後の大主教）が幕末に箱館の領事館ではじめた露学校であり、これはニコライが東京に移っても続き、一八七三（明治六）年には塾生の数一四〇―一五〇名

にのぼったという。ロシアの《正教宣教協会》に宛てた同年の報告書でニコライはこう書いている。

神学校――これはこの程本来の姿を取るにいたりました。これまではロシア語と諸学の初歩を教える学校で、人数も多く手間のかかる学校でした。なんらかの目的でロシア語を学びたいと思う者は、皆ここにやって来ました。ロシア語を教える学校が、東京にはほかになかったからです。確かに、一昨年政府はロシア人教師を雇いはしたのですが、肝心の学校の設備が出来ていなかったので、教師は仕事をしようにもやりようがないという有り様でした。ここにきてやっと他の外国語の学校と並んで、ロシア語の学校も発足しました。今月（三月）の初旬に入学試験がありました。かくして私も、これまで少なからざる時間と労力を取られてきた大量の人々から解放されることになったのです。

外務省所管の独魯清語学所を文部省に移管し、東京外国語学校が発足するのは、一八七三（明治六）年十一月四日だから、時間的にズレがあるが、ここでニコライが「ロシア語の学校」と呼んでいるのが、本学の魯語科であるのは間違いなかろう。ちなみに旧外語が入学試験をはじめて行ったのは、一八七四年三月のことであった。なお当時の外国人が語科を学校と呼んでいたことは後出のメーチニコフの記述とも一致する。

魯語学科最初の生徒たち

ここで言及されているニコライ塾から旧外語への生徒の移籍については、後に愛媛や新潟県知事、京都市長を歴任する安藤謙介が、『校友会雑誌』（一九一〇年十二月）でこう回想している。

自分は若年の頃より藩の漢学塾に講師兼塾頭を遣つて居つたが、明治五年露語研究の目的でニコライの塾に入つた。固より学資不足のために、研究の傍子弟の教育をせねばならぬ次第であつた。処が語学校（大正時代まで本学は外語ではなく語学校と呼びならわされていた――筆者）露語科の教師トラクテンベルグが露語科の生徒が少数であるために、ニコライ塾へ

生徒を別けてくれる様にと、申し込んで来た。そこで此の人の紹介でニコライの生徒四十人程打連れて語学校に入学したが皆貧乏人のこと故其の内の上級の者には貸費して貰ふことを条件とした。

（「旧語学校回顧談」）

安藤自身は魯語学下等第二級に配属された。これは一八七四（明治七）年段階では上から二番目のクラスであり、上等第六級には村松愛蔵（自由党きってのロシア通として知られ、ロシア虚無党の影響を受けたとされる一八八四［明治十七］年の飯田事件の首謀者。出獄後、新聞記者を経て立憲政友会の代議士となり、日糖事件という疑獄事件に巻き込まれたのを機に、救世軍に転じ、生涯を宗教家として生きた）、黒野義文（一八八二年より母校の助教諭となり、二葉亭四迷等を教えるが、外語廃校後、ロシアに渡り、シベリアを徒歩で横断、ペテルブルグ大学日本語科講師となり、コンラッド、エリセーエフ、ネフスキー、スパルヴィン等のすぐれた日本学者を育てた）、代島義俊（開拓使派遣生）の三名が名を連ねるだけであった。

二　旧外語魯語学科の発足と外国人教師

初期外国人教師の横暴さ

こうして旧外語魯語科は始動するが、教員スタッフではかなり苦労することになる。メーチニコフの回想によると、初代のロシア人教師（これは外務省語学所時代の雇い入れ）は、シイドルフといい、洋銀一七〇元の高給に気を良くして、酒びたりになりまともな授業もしなかったので、ついに生徒と取っ組み合いの喧嘩になり、解雇されたという。彼のことはシイドロフ・ヘオドルロゼレヴィッチの名で外務省資料にその記録が残っている。

ついでジューリン・ヴィトコフスキー（『東京外国語学校沿革』ではウドコフスキー、独語科となっている）という人物が、外務省雇いから転じるが、英、独、仏、露、ラテン語にも通じたこの青年は、ポーランド系のユダヤ人で、文部省での評判も良かったが、前出の市川文吉が着任後会ってみると、なんと彼の話す言葉がロシア語でもポーランド語でもなかった（おそらくはイディッシュ語）ことが判明し、独語科へ移籍されたという。

これに懲りた文部省は、正規のルートで教師を求めることにし、函館（一八六九［明治二］年に函館と改名）領事館の書記官トラクテンベルグを四五〇円という破格の月給で雇い入れる（一八七三―七五）。ところがこの人物が食わせ者で、ニコライ塾から生徒を集めたまではよかったが、その後正体を暴露し、無断欠席が多く、文部省はその処遇に手を焼くことになる。「語学所当省ヘ引移候後平日欠席不少其他妥当ヲ欠キ候所為モ纓次相見ヘ、到底其器ニ適セザル人物ニ有之候ヘトモ……」（文部省伺、明治八年十二月九日）、「性情懶惰自侭ニシテ……同省ノ指揮ヲ肯セサル等該校ヘ障碍少ナカラズ」（第二科議案、同八年十二月二十三日）結局この人物は本人の希望により、契約期間を一七か月残して、給料を満額貰い帰国してしまう。

このようなエピソードを長々と紹介したのは、この時期のいわゆるお雇い外国人には後発国日本を蔑む者が少なくなかったことを示したかったからである。それ以後文部省は外国人教師の雇い入れに際し、神経過敏となり、契約条文には必要以上に細かい条項が盛り込まれることになる。その一例として一八七六（明治九）年雇い入れのコストィリョフ（長崎領事館からの出向で、『沿革』にはカヌーフ・イリョフと誤記されている）の契約書（原文ロシア語）がペテルブルグの東洋学研究所のアルヒーフに残されているので、参考までに引用しておこう。

一、コストィリョフ氏は、東京外国語学校において次の科目を教授するものとする。ロシア語、歴史、地理、文学。期間は

明治九年三月十二日より明治十一年五月十二日迄の二ヶ年とする。
二、給料二五〇円及び住宅費二〇円は月末に支給されるものとする。
三、授業時間数、時間割は校長の定めるものとし、一日の授業は六時間以内とする。
四、授業に変更のある場合には、コストィリョフ氏は校長の承諾を得るものとする。
五、コストィリョフ氏が学校の定める休日以外に、病気でもなく無断欠勤した場合には、月給より日割り計算で差し引くものとす。またコストィリョフ氏が、授業の職務を果たせなくなったり、素行不良あるいは契約不履行があった場合、校長はこの契約を破棄することを得、その日をもって月給の支給は打ち切られるものとす。
六、コストィリョフ氏の都合により、本契約を破棄することは認められるが、その日をもって月給は打ち切られるものとす。但し契約解消の希望ある場合、氏は一ヶ月前に校長にその旨通告するものとす。
七、東京外国語学校が何らかの事情で、この契約期間中にコストィリョフ氏を解雇する場合、契約解消時より三ヶ月分の給料を受けるものとし、この旨を一ヶ月前に通告せねばならない。但し契約解消時に残り契約期間が三ヶ月未満の場合、三ヶ月分ではなく、残り期間分の給料が支給されるものとす。
八、コストィリョフ氏死去の場合、本契約は破棄され、氏の逝去までの給料は最寄りの領事館に委託するものとす。

そればかりか、別の外国人教師は、死亡した場合の遺骸の処置にまで言及していたと書いている。

三　魯語科とナロードニキ精神

魯語科の救世主メーチニコフ

スタッフの問題は外国人ばかりではなかった。一八七四（明治七）年二月には、主任教諭の市川が外務省に転じ、特命全権公使榎本武揚に随行してペテルブルグに赴任、かの樺太千島交換条約の通訳を務めることになるから、魯語

科は火の車の状態だったはずである。しかし救世主は思いもかけぬ方向からやって来た。時の文部卿木戸孝允の斡旋で、米国の市民権を持った亡命ロシア人（彼は日本に来る直前に米国に渡り、ニューヨーク州の市民権を二ドルで買っている）が一八七四年の秋に着任するのである。彼の名はレフ・メーチニコフ（一八三八―八八）、これまですでに何度か引用してきた人物である。

一八五九年以来亡命生活を送ってきたメーチニコフは、イタリアの解放運動リソルジメントでガリバルヂ軍の副官をつとめただけでなく、スイスを拠点にロシア、スペイン、フランス、モンテネグロの革命運動に参加した過去を持ち、第一インターナショナルのバクーニン派に名を連ねる現役の革命家であった。専門は地理学、民族学でしかも東洋をフィールドにしていた。コンミューン敗北後のパリで、日本の革命（明治維新をメーチニコフはもっともラディカルな革命と呼ぶ）の報に接し、日本語の修得を決意した彼は、パリ大学日本語科教授レオン・ド・ロニーの紹介でジュネーブ滞在中の大山巌（後の陸軍元帥）と邂逅し、日仏語の交換授業を行い、すでに一三か国語を修得していた彼は、ほぼ半年で日本語をマスターしてしまう。

そしてちょうどその時、世界歴訪の旅を終えた岩倉使節団の一行がジュネーブにやってくるのである。また大久保利通のあとを追い、使節団より一足先に帰国の途についた木戸孝允とは、ジュネーブで二度会見していることが木戸の日記から分かる。高崎正風、田中光顕、田中不二麿等、使節団の随員とも親しく交わったメーチニコフは、なんと西郷隆盛の招聘を受けて、薩摩藩子弟のための学校を開設するために、来日したのだった。彼が来日した一八七四年は、祖国ロシアでナロードニキ運動を迎える年である。メーチニコフにしてみれば、後進性のシンボルとされる東洋へ行くことは、形を変えた《ヴ・ナロード》（民衆の中へ）であったといえよう。なぜなら《ヴ・ナロード》運動は、ロシア農村の後進性の実情を探り、民衆と接近することを目的としていたのだから。

メーチニコフによって活気づく魯語科

彼こそは東京外国語学校魯語科のみならず、日本のその後のロシア学の方向を決定付けた人物といっても過言ではない。前出の安藤はこう語る。「其年の秋にメチニコ（ママ）という魯西亜人が新任して教鞭を執る事となつた。此の人の兄さんは露西亜南部の控訴院長を勤め、弟さんは後年オデツサの大学長となられた。氏は中年俊才を以て伊国統一の大事業を完成した大政治家ガリバルヂの参謀として各所に転戦し、身に七創を蒙つた程の勇士で、元気旺盛な人であつた為め、生徒も其感化を受けて大に勉強した結果、露語科生徒は非常に活気を帯びて来た」（同右）

メーチニコフの死後、その遺稿を編集し、『文明と歴史的大河』（一八八九年）として出版した畏友エリゼ・ルクリュ（フランスの高名なアナーキスト、地理学者）は、序文で外語時代のメーチニコフは「生徒のあいだで絶大な信頼と人気を博した」と書いているが、安藤のこの証言はそれを裏書きするものである。

サムライ姿のメーチニコフ

維新後の日本に殺到する文明人という名の野蛮人の道徳的退廃に憤りを覚えたメーチニコフ（新学期が始まるまで彼は、築地の外国人租界に居住し、そうした西洋人の醜態を目のあたりにしていた）は、わずか一年半の日本滞在ではあったが、魯語科の生徒の知的欲求にこたえるべく、教育に専念し、同時に維新革命を成功させた日本の文明論的意義を精力的に探っていくのである。

亡命系教師の系譜

これまでのメーチニコフ研究では、彼が革命家としての自分の過去を伏せていたとされてきた。現に大山巌宛ての手紙で彼が実名を出さず、「跛の魯人より」とだけ記していたため、『大山巌伝』の編者は、この人物の特定に苦慮したのだった。しかし安藤の証言を見るかぎり、彼は自分の経歴を生徒に明かしていたことになる。「首都に外国語学校が設立されたと聞くや、全国各地から生徒たちがまさに群をなして集まってきた。なかには、十一、二歳の子供もいたが、大部分は青年であり、時には妻子持ちで、すでに先般の内乱でなんらかの英雄的武勲をたてた大人のサムライまでもまじっていた」（『回想の明治維新』岩波文庫、一九八七年、二七二ページ）とメーチニコフは書いている。そうであればこそ、改革の意気に燃える生徒たちはこの新しい先生を慕ったにちがいない。刀をさしたサムライ姿の彼の精悍な写真が残っているが、足の不自由な彼は馬に跨って外語に通っていたようだ。

ちなみに安藤が言及しているメーチニコフの兄はトルストイの小説『イワン・イリイッチの死』のモデルであり、弟は梅毒、回帰熱の研究でノーベル医学・生理学賞を受けた細菌学者で、日本におけるヨーグルトの普及者であることはもはやほとんど忘れられている。そしてこのメーチニコフの在職中に、中江篤介（兆民）が校長として着任するのである。校長在職期間がわずか三か月とはいえ、仏語科の教師中川元などもまじえ、フランス語でかなり突っ込ん

だ話をしたはずである。「仏蘭西人でも此のメーチニコフほど仏語の演説のうまいものは得難い」と兆民は評していたと、横山健堂は伝えている。

極度の貧血症のため、メーチニコフは一八七五（明治八）年末に離日を余儀なくされるが、これ以後文部省は領事館系の教師よりも亡命系の教師を重用するようになる。長い亡命生活を送ってきたメーチニコフは、プレハーノフ、トカチョーフ、スチェプニャーク・クラフチンスキー、クロポトキンといった錚々たるナロードニキ革命家と親交があったから、おそらく彼の斡旋で政治亡命者が相次いで外語に雇い入れられることになったのであろう。資料に残る限りの名を列挙すれば、前出のコストィリョフを除いて全員亡命系である。ボゴモーロフ（一八七六―七七年）、ダニーロヴィチ（一八七七―七九年）、コレンコ（一八七八―八四年）、グレイ（一八八四―八五年）となる。

コレンコの文学講義

これまで中村光夫をはじめとする二葉亭四迷研究者は、グレイの朗読形式の文学の授業の影響力を指摘してきたが、在職年数から言ってもコレンコの存在を無視できない。そこでロシアではメーチニコフ以上に無名であるが、わが国のロシア語教育史で大きな役割を果たしたこの人物について少し述べておこう。

一九二〇年代にソ連で編纂された『革命家辞典』にこのアンドレイ・コレンコ（一八四九年生）に関する記述がある。それによるとペテルブルグ農業大学の学生時代に、政治活動のかどで逮捕され、ペトロ・パウロ要塞監獄に拘留（一八七〇年）後、チェルニゴフ県に流刑、官憲の監視下に置かれたとある。一八七一年にアメリカに逃亡、そこから外語に赴任したのであろう。

北海道立文書館には一八七四（明治七）年に外語に入学、八一年に卒業した小島倉太郎文書が保管されており、そ

アンドレイ・コレンコ。1884年6月20日、コレンコが嵯峨の屋に贈った写真（矢崎家所蔵）

こには一八七九（明治十二）年のコレンコのロシア文学史、ロシア詩の講義を克明に筆記したノートが含まれており、当時の外語の授業の実態を伝える貴重な資料となっている。

そこではエカテリーナ時代からプーシキン、ゴーゴリにいたるロシア文学の流れがかなり詳細に語られ、ロシア自然主義文学における言文一致の伝統や、ゴーゴリの社会派小説とりわけ「涙を通した笑い」の意味が詳細に分析されており、その内容は今日のロシア文学史の記述と比べても遜色のないものである。

またコレンコが暗唱用に編んだロシア詩集には、デカブリストのルイレーエフやオドエフスキー、さらにゲルツェンと並んでナロードニキ思想の先駆者となったオガリョーフの詩が数多く収録されている。ここで重要なのは、露語科（一八七七〔明治十〕年より表記が変わる）の生徒たちが、脱亜入欧をめざし文明開化の道をひた走る世情のなかで、西欧文明との対決のなかで生まれたナロードニキ思想の実践者の口から、ロシア文学に再現された社会批判や、いわゆる余計者の意義を熱っぽく聞かされたことであり、そうした精神の凝縮した詩を原語で朗唱しながら、神保町あたりを闊歩していたことであろう。このなかで後の二葉亭による言文一致の素地がごく自然に培われていくのである。ちなみにコレンコの講義は、作家として二葉亭のライバルとなる嵯峨の屋お室（本名矢崎鎮四郎、明治十六年卒業）の「露国文学一班」（『志がらみ草紙』）の下敷きとなっている。（なおコレンコの文学講義については渡辺雅司

「日本における最初のロシア文学講義」、『同志社外国文学研究』、第三九号参照）

グレイとは何者か？

このコレンコのあとを継いで教壇に立った米国籍のニコライ・グレイは、教科書不足を朗読形式のユニークな授業で補った。「学校時代に教場で教師がガンチャロッフを読んで呉れたことがある。本は只一冊しかなかったので、我々生徒は本なしで読むのを聞いて居る。その教師は実に読むに上手であったが面白くてたまらぬ。」（二葉亭四迷『予の愛読書』）異色の教師グレイの感化力については、太田黒重五郎はじめ多くの生徒の証言が残っているが、その経歴は今のところはっきりしない。

外語時代の二葉亭四迷

ロシアの日本研究者イワノーワは、グレイはナロードニキ運動の母体となったチャイコフスキー団の創始者ニコライ・チャイコフスキー（一八五〇―一九二六）との仮説をかつて提起したが、立証することはできず、つづいて《土地と自由》結社員のフェリクス・ヴォルホフスキー（一八四六―一九一四）では、との説を再提起している。

この人物は一八七四年に逮捕され、その後シベリア流刑になるが、米国人ジョージ・ケナン（一八四五―一九二四、『シベリアと流刑制度』［一八九一］の著者。なおソ連大使を務めた同名の著名な外交史家は甥にあたる）の助力で日本へ脱出、その後アメリカを経てロンドンへたどり着いているから、一年間外語で教鞭をとった可能性がない

とは言えない。特定はできないにせよ、このグレイという人物が強烈な個性の持ち主であったことは、疑いないだろう。旧外語露語科のこうした知的雰囲気を筆者はナロードニキ精神（当時の言い方では虚無党気質）と呼びたいのである。そうであればこそ、生徒のなかから、村松愛蔵のような民権家や嵯峨の屋、高須治助（プーシキンの『大尉の娘』の訳者）さらには異才のジャーナリスト、小説家として時代を先取りするグルメ本や予言の書を数多く発表した村井寛（弦斎）のような文学者が出てきたのであろう。

四　日本人教師陣とカリキュラム

日本人スタッフの顔ぶれ

外国人教師の記述が長くなりすぎたので、ここで日本人教師の顔ぶれを紹介しておこう。市川が抜けた後、柳田二郎と大前退蔵の名前が一八七四（明治七）年の「官員並生徒一覧」に記されている。柳田がどのような人物か定かでないが、遣魯留学生の田中次郎ではないかと推定される。また大前は二代目ウラジオストック貿易事務官、臨時代理公使をつとめる人物である。しかし教師として長く教鞭をとった形跡はなく、一八七六年七月には、かつての加賀藩遣魯留学生の嵯峨寿安が、わずか一年間教鞭をとっている。この嵯峨は謎の多い人物だが、自分の意志でシベリアを横断した（それも単身、徒歩で）最初の日本人であり、帰国後文部卿木戸の斡旋で開拓使御用掛、函館魯学校教師を経て外語に着任、一八七七年一月の校長内村良蔵による教育課程の変更を不服として退職している。

そしてこの頃文部省から露和辞典編纂の辞令が出されるのだが、これは次の主任教諭古川常一郎（在職期間一八七九－八五年）、市川文吉（一八七九－八五年、外務省出仕）等の手で一八八七（明治二十）年に『露和字彙』として

『露和字彙』

出版される。上下巻合わせて二、八七八ページの大冊で、語彙数は十数万語というから、当時としては画期的な辞書である。ただし外語の図書館には一セットしかなかったので、生徒は先を争ってこれを借り出したという。ついでながら、今出た古川、市川、長谷川（二葉亭）の三人は明治時代の「ロシア語の三川（せん）」と称せられたことも言い添えておこう。

また生徒のなかで優秀な人材は卒業をまたずに助教、あるいは助訓として抜擢され、教育に当たった。近藤義文（一八七九年のみ）、藤堂紫郎（四郎とも。一八七九－八五年）、相原七郎（一八七九－八二年）、黒野義文（一八八二－八五年）がその例である。以上が旧外語露語科の教員スタッフとなる。

露語学科のカリキュラム

それでは旧外語では、そのような教師によってどのような授業がなされていたのであろうか。その前にこの学校では外国の中等学校レベルの授業がすべて当該外国語でなされていたことを知っておかねばならない。「教師は大抵外国人で然

し日本人もあつた、教科書は全部原書で訳読の時間は日本人の教師が通訳せられた」（前掲安藤「回顧談」）との証言もある。『東京外国語学校一覧』には、一八八〇－八一（明治十三－十四）年の露語科の詳しいカリキュラムが教科書、参考書も含めて明記されているので、煩瑣になるが紹介しておく。学習用語、文法用語が今日とは異なっており、その意味でも資料編に回すのは惜しいからである。

第一年第一期　下等第六級

綴字　トルストイ氏ノ以呂波ニ就テ以呂波及単語ノ綴字法ヲ授ク（週五時間）
読法　読本ニ就キ発音ノ法ヲ授ク（教科書パウリソン氏読書篇）（同五時間）
習字　運筆法及大小字ノ快走体ヲ習ハシム（同四時間）
訳文　パウリソン氏読書篇（同四時間）
算術　数目命位、加法、減法（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）（同六時間）
国書　読書力ヲ酌量シ輪講、講読或ハ属文セシム（教科書史記、綱鑒易知録、明鑒易知録、論語、小学、文章軌範、日本外史）（同三時間）
体操　亜鈴棍棒演習（同三時間）

第一年第二期　下等第五級

綴字　トルストイ氏ノ以呂波ニ就テ単語単句ノ綴字ヲ練習セシム（週二時間）
読法　音声ノ高低ヲ明ニセシム（教科書ペレウレススキー氏読書入門）（同四時間）
習字　大小字ノ快走体（教科書グラウィンスキー氏習字帖）（同三時間）
書取　簡単ノ文章ヲ書取ラシム（同二時間）
文法　総論、実名辞、形容辞（教科書イワーノフ氏露文典）（同三時間）
暗唱　単語日用ノ話語ヲ授ケ之ヲ暗記セシム（同二時間）

訳文　パウリソン氏読書篇ニ就キ其文意ノ訳ヲ授ク　（同三時間）
算術　乗法、除法、四則雑題、括弧用法（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）　（同五時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　マリニン及ブレニン両氏算術問題集
第二年第一期　下等第四級
読法　流読ヲ学ハシム（教科書ペレウレススキー氏読書入門）　（週三時間）
習字　前級ニ同シ（教科書ラグーゼン氏習字帖）　（同二時間）
書取　前級ニ同シ　（同二時間）
文法　形容辞、数辞、代名辞（教科書イワーノフ氏露文典）　（同三時間）
暗唱　小説中ノ撰文ヲ授ケ之ヲ暗記セシム（教科書クルイロフ氏小説書）　（同二時間）
会話　日用ノ談話並ニ其訳ヲ授ク（教科書アガービーゴンチヤレンコ氏露英会話）　（同二時間）
訳文　ウシンスキー氏小児世界第一篇ニ就テ其文意ノ訳ヲ授ケ及イロワイスキー氏ノ古代史ヲ講読セシム　（同五時間）
算術　諸等数、通法、命法、諸等加法、諸等減法、諸等乗法、諸等除法、因数、最大公除数、最大公倍数（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）　（同二時間）
地理　地球、地球運行、地面想像圏、両半球、両極、平面球、地図、経緯線、日月星、地球内部、地皮、水陸分別及外形、陸面形状、海底及海水、大気、満潮及干潮、洋流、風、陸水、気候、植物、動物、人民（教科書スミルノフ氏地理総論）　（同三時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　コルネット氏露英会話指南、ブロムメ氏博物図書、マリニン及ブレニン両氏算術問題集、リヨウエ氏算術階梯、アントノフ氏露文典、イリイン氏万国地図書

第二年第二期　下等第三級

読法　前級ニ同シ（教科書ウシンスキー氏小児世界第二篇）（週二時間）
習字　前級ニ同シ（教科書ラグーゼン氏習字帖）（同一時間）
書取　前級ニ同シ（同二時間）
文法　動辞（教科書イワーノフ氏露文典）（同二時間）
暗唱　前級ニ同シ（同二時間）
会話　前級ニ同シ（教科書コルネット氏露英会話指南）（同二時間）
作文　簡易ノ文ヲ作ラシム（同一時間）
訳文　前級ニ同シ（同五時間）
算術　分数、通分法、命分法、約分法、通分母法、通分子法、分数諸等通法、分数諸等命法、加分法、減分法、乗分法、除分法（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）（同二時間）
地理　欧羅巴ノ境界及幅員、地勢、山、低地、気候、植物、動物、河湖、人口、宗教、生業、産物、政体、教化、府県、都府（教科書スミルノフ氏欧羅巴地誌）（同二時間）
歴史　上古ノ史（自開闢至馬基頓史）元始ノ人類、建国、上古亜細亜、亜弗利加ノ人類、及其国史、太古ノ希臘、希臘ノ諸国及殖民、波斯トノ戦争、希臘ノ開化、伯羅奔尼撒ノ戦乱、希臘国ノ衰滅、馬斯多尼ノ史（教科書ベルテー氏万国史略）（同三時間）
国書　前級ニ同シ（同三時間）
体操　前級ニ同シ（同三時間）
参考書　アントノフ氏露文典、ベリヤーエフスキー氏露文典、ブロムメ氏博物図書、マリニン及ブレニン両氏算術問題集、リョウエ氏算術階梯、モストフスキー氏欧羅巴地誌、ヲボトフスキー氏万国地誌、イリイン氏万国地図書、ドブリヤコフ氏古史図本、ヨルダン氏歴代沿革図本、イロワイスキー氏上古史

第三年第一期　下等第二級

読法　前級ニ同シ（教科書小児世界第二篇）（週二時間）
習字　前級ニ同シ（同一時間）
書取　撰文ヲ口述シテ書取ラシム（同一時間）
文法　副辞、前置辞、連続辞、間投辞及品詞分類（教科書イワーノフ氏露文典）（同二時間）
暗唱　名家ノ著書撰文及ヒ其他ノ小説等（同二時間）
会話　日用緊要ナル話語ヲ練習セシム（同二時間）
作文　簡易ノ記事及ヒ尺牘ヲ作ラシム（同二時間）
訳文　ウシンスキー氏小児世界第二篇ニ就テ其文意ノ訳ヲ授ケ及シュリギン氏中世史ヲ講読セシム（同五時間）
算術　小数、小数加減法、小数乗法、小数除法、小数化法、有究無究分数、単混循環小数、連分数連分数化法（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）（同二時間）
地理　欧羅巴ノ続及亜細亜ノ境界、幅員、地勢、山、低地、気候、植物、動物、河湖、人口、宗教、生業、産物、政体、教化、府県、都府（教科書スミルノフ氏欧羅巴地誌、スミルノフ氏四大洲地誌）（同二時間）
歴史　上古史ノ続（自羅馬ノ建国至基督教弘衍ノ時）羅馬、国王政治ノ時巴的黎支ト布列丕トノ排撃、羅馬国威ノ振興、風俗ノ変易、羅馬共和政治ノ衰微、羅馬帝国羅馬国ノ状況、羅馬ノ開化（教科書ベルテー氏万国史略）（同三時間）
国書　前級ニ同シ（同三時間）
体操　前級ニ同シ（同三時間）
参考書　バシーストフ氏露語教授文選、アントノフ氏露文典、ベリヤーエフスキー氏露文典、マリニン及ブレニン両氏算術問題集、リヨウエ氏算術階梯、モストフスキー氏欧羅巴地誌、モストフスキー氏万国地誌、ヲボドフスキー氏万国地誌、イリイン氏万国地図書、ヨルダン氏歴代沿革図本、ドブリヤコフ氏古史図本、イロワイスキー氏上古史、シロスセル氏万国史

第三年第二期　下等第一級

読法　バシーストフ氏露語教授文選ニ就キ読法ヲ練習セシム（週二時間）

習字　前級ニ同シ　（同一時間）
書取　選文ヲ口述シ之ヲ書取ラシメ句読及段落ヲ切ルノ法ヲ知ラシム　（同一時間）
文法　作語法、章句、格語、合語法、管語法、用格法、置語法句読用法及正記法ヲ授ケ撰文ノ分析ヲ学ハシム（教科書イワーノフ氏露文典）　（同二時間）
暗唱　前級ニ同シ　（同二時間）
会話　前級ニ同シ　（同二時間）
作文　前級ニ同シ　（同二時間）
訳文　前級ニ同シ　（同五時間）
算術　比及比例、三率規則、単率規則、合率規則、歩割規則、折減算法、鎖法、比例除法和較比例（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）　（同二時間）
地理　亜弗利加、亜米利加、濠斯太剌里亜ノ境界及幅員、地勢、山、低地、気候、植物、動物、河湖、人口、宗教、生業、産物、政体、教化、府県、都府（教科書スミルノフ氏四大洲地誌）　（同二時間）
歴史　中古ノ史（自国民大遷移ノ時至十字軍ノ末）国民ノ大遷移、西羅馬ノ滅亡、加爾利人、日耳曼人、日耳曼人創建ノ諸国、希臘帝国、亜剌伯、加露冷家ノ時代国帝ト教王トノ争乱、戟爾弗党及蹄伯爾倫党、十字軍（教科書イロワイスキー氏中古史）　（同三時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　アントノフ氏露文典、ベレウレススキー氏実地文典、ガルーソフ氏露語、作語法、ベリヤエフスキー氏露文典、マリニン及ブレニン両氏算術問題集、リヨウエ氏算術階梯、イワニツキー氏算術問題集、イリイン氏万国地図書、ヲボドフスキー氏万国地誌、モストフスキー氏万国地誌、ヨルダン氏歴代沿革図本、シロスセル氏万国史

第四年第一期　上等第四級

書取　選文ヲ口述シ速写法ヲ学バシム　（週一時間）

詞格　作文論（教科書ペレウレススキー氏実地文典）　（同二時間）
暗唱　名家ノ詩文　（同二時間）
作文　叙文及記文等ヲ学ハシメ並ニ論文ヲ作ラシム　（同二時間）
訳文　シュリギン氏新世史ニ就テ其ノ訳ヲ授ケ及之ヲ講ゼシム　（同一時間）
算術　諸比例復習、算術雑題（教科書マリニン及ブレニン両氏算術階梯）　（同一時間）
地理　露西亜ノ境界、幅員、山、河湖、気候、植物、人口、宗教、州県、都府、地文学ノ総論、金石、陸地、島嶼、山谷、高原、平野、火山、地震、温泉、洋海、深浅海水色質及温度、洋動、潮洋流、波浪、泉河湖沼沢、露霜霧雲雨雪霰（教科書レベデフ氏露国地誌、ベツヘル氏天地学）　（同二時間）
歴史　中古史ノ続、中世第二半期ノ仏蘭西及英吉利、発布斯堡時世ノ日耳曼、意太利、斯于的那維諸国、西方薩拉瓦人、東羅馬ノ滅亡中世ノ状況（教科書イロワイスキー氏中古史）　（同三時間）
物理　普通性、動、力、槓杆、引力、物体墜落法、分子引力、静水、滴流体ノ平準、被沈体、比重、験液器（教科書パウリソン氏物理初歩）　（同二時間）
代数　代数基原、四則、分数、関係、比例（教科書ダウイドフ氏初等代数）　（同二時間）
幾何学　総論、平面ノ部、直線論、角論、形積平行線、比例線、設題（教科書ダウイドフ氏諸等幾何）　（同二時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　マリニン及ブレニン両氏算術問題集、リヨウエ氏算術階梯、文部省出版算術問題集、ヨルダン氏歴代沿革図本、シロスセル氏万国史、ガノー氏普通物理学、グラエーウイチ氏物理学、パウリソン氏物理教授本、イリイン氏万国地図書、ヲボドフスキー氏万国地誌

第四年第二期　上等第三級

書取　前級ニ同シ　（週一時間）
詞格　章句論、字論、比喩、詞格ノ普通及特異品格論（教科書ペレウレススキー氏実地文典）　（同二時間）

演説　所思所感ヲ正ク論シ並テ弁論ノ法ヲ授ク　（同二時間）
作文　前級ニ同シ　（同二時間）
訳文　ヲフシヤニコフ氏史記文粋ニ就キ文意ノ訳ヲ授ケ及ロレンツ氏今世史ヲ講セシム　（同五時間）
記簿法　単式（教科書スノーポフ氏単復記簿階梯）　（同二時間）
地理　地文学ノ続、大気、温、風、気候、視象、電象、地球ノ構成、天文学、地平、太陽一昼夜ノ視運、太陽一年ノ視運、星天、太陰、恒星、遊星、地球の球形、地星、地球一昼夜ノ運動、地球一年ノ運動、月星、太陽、太陽系（教科書ベツヘル氏天地学）　（同二時間）
歴史　新世ノ史大発明及大発見意太利ノ戦争、学術ノ再興日耳曼ノ宗教改革加特力ノ反動西班牙昵特爾蘭仏蘭西ニテ加特力教及君権ノ凱捷テユードル家及去阿爾家時代ノ英吉利斯干的那維諸国、普魯士、波蘭土耳其三十年ノ戦乱（教科書イロハスキー氏新世史）　（同二時間）
物理　気性、晴雨針、孱囲気圧力ノ作用、気性ニ基ク諸器、卿筒、軽気球、音論、楽音、弦線ノ振動、発音管、熱論、温線ノ放射及反射、物体導温性、物体ノ膨張及変化（教科書ガノー氏普通物理学）　（同二時間）
代数　一次方程式、一元一次方程式ノ組成法、二元方程式多元方程式、多元方程式ノ組成一次方程式ノ探究、次法解、根数、有奇零数量、開平、開立（教科書ダウイドフ氏初等代数）　（同二時間）
幾何学　平面、正多角形、円内円外ノ切形、並行四辺形ノ測量、撮写法（教科書ダウイドフ氏初等幾何学）　（同二時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　ヨルダン氏歴代沿革図本、シロスセル氏万国史、フオンデルセー氏単複記簿階梯、マリニン及ブレニン両氏天地学階梯、ズーエフ氏普通地文学、ガノー氏物理全科、グラエウイチ氏物理学、フランボーリ氏物理問題、クラエウイチ氏代数問題集、イワーノフ氏代数決題、リヨウエ氏初等代数、ブツエウイチ氏幾何問題集、モズゴフ氏幾何決題

第五年第一期　上等第二級

修辞　散文ノ定法、詩学ノ定法、詩歌論（教科書フイローノフ氏露国文章軌範）　（週三時間）

演説　前級ニ同シ　（同二時間）
作文　前級ニ同シ　（同三時間）
論理　論理学ノ釈義、切要及区別、思考基律ノ訓、想像及観念ノ訓、弁決ノ訓、観念ノ釈義及分別ノ訓（教科書スツルーウエ氏論理階梯）　（同二時間）
訳文　（教科書ボークリ氏英国文明史及ロレンツ氏最新世史）　（同五時間）
記簿法　複式（教科書スノーポフ氏単復記簿階梯）　（同一時間）
歴史　新世史ノ続　路易第十四ノ時世、第十八世期西南欧州ノ諸国、英吉利、北米合衆国第十八世期ノ日耳曼、第十八世期欧州東北ノ諸国、仏蘭西革命第一、仏蘭西皇帝政治ノ時、最新世ノ略記（教科書イロワイスキー氏新世史）　（同二時間）
代数ニュートン氏ノ二項数量法、二次方程式決、二次方程式ノ探究、二次ニ化スヘキ方程式、多元二次方程式、空量、不等記号、不定方程式、設題（教科書ダウイドフ氏初等代数）　（同二時間）
物理　蒸気論、蒸気機関、湿気論、温熱ノ為メ発スル気象、光論、光線ノ反照、平鏡、曲鏡、光線ノ屈折、虹鏡、透鏡、日光分析、視学諸器、視覚（教科書ガノー氏普通物理）　（同二時間）
幾何　円界ノ量法、円積量法、設題（教科書ダウイドフ氏初等幾何）　（同二時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　ヨルダン氏歴代沿革図本、シロスセル氏万国史、ミルリ氏論理原礎、スウエチリン氏論理階梯、フオンデルゼー氏単復記簿階梯、クラエウイチ氏代数問題集、イワーノフ氏代数決題、リヨウエ氏初等代数、ガノー氏物理全科、クラエーウイチ氏物理学、フランボーリ氏物理問題、ブツエーウィチ氏幾何問題集、モズゴフ氏幾何決題、マリニン氏幾何階梯

第五年第二期　上等第一級
修辞　文学史　（週三時間）

演説　前級ニ同シ　（同二時間）
作文　論文其他雅致ノ文章等　（同三時間）
論理　定理法ノ釈義、組織及編成、演繹、帰納、証明、序法（教科書スツルーウェ氏論理階梯）　（同二時間）
訳文　ボークリ氏英国文明史及ジョゼフガルニエー氏経済書　（同五時間）
記簿法　前級ノ続キ　（同一時間）
歴史　露国ノ史侯民両政ノ阿羅思（ウデリノウエチエワーヤルース）（第一、東欧羅巴及阿羅思ノ始第二、侯民両治制ノ開状第三、蒙古ノ圧制第四、侯民両治阿羅思ノ内況第五、利徳華管轄ノ西南阿羅思第六、東北ノ阿羅思莫斯科ニ伏従ス）莫斯科及利徳華ノ阿羅思（第一、東北阿羅思ニテ侯民制ノ廃滅及莫斯科国ニテ君権ノ振起第二、乱時第三、十六世期及十七世期ノ西方阿羅思第四、ロマーノフ家ヨリ出タル三帝ノ時代莫斯科国ノ内状）露西亜帝国（第一、彼得大帝ノ世即国家改革ノ期第二、彼得大帝ノ三後嗣第三、十八世期ノ露西亜ノ開化第四、国家一統及政略ノ堅強第五、十九世期第一半期露西亜開化ノ論）（教科書イロワイスキー氏露国史）　（同二時間）
物理　磁気、電気、交感電発、電気器、電気試験、聚電器、電気ノ作用、空中電気、気象、瓦爾華尼電気、電気循環、電磁作用、電気流動論、電磁石、引起力ノ循環（教科書ガノー氏普通物理）　（同二時間）
代数　算術連級、数幾何連級数、対数、対数表ノ組成及其法、重利、重還、算法設題（教科書ダウイドフ氏初等代数）　（同二時間）
幾何　立体ノ部（教科書ダウイドフ氏初等幾何）　（同二時間）
国書　前級ニ同シ　（同三時間）
体操　前級ニ同シ　（同三時間）
参考書　ミルリ氏論理原礎、スウエチリン氏論理階梯、ウラジスラウレフ氏論理学、フランデルゼー氏単復記簿階梯、シロツセル氏大万国史、ソロウイヨーフ氏大露西亜史、ガノー氏物理全科、フランボーリ氏物理問題、クラエーウイチ氏物理学、クラエーウイチ氏代数問題集、リヨウエ氏初等代数、イワーノフ氏代数決題、ラランド氏対数表、ブツエーウイチ氏幾何問題集、モズゴーフ氏幾何決題、マリニン氏幾何階梯

授業内容の革新性

引用があまりに長くなってしまったが、旧外語露語科の授業内容を具体的に知ってもらうためにあえて、全文を掲げた。もちろんこれは今日のシラバスのようなものだから、必ずしもこの通りの授業がなされたとはいえないが、これらの科目をすべてロシア語で教授したのだから、生徒の負担は相当なものだったろう。しかも露日辞典はまだなかったので、露英、英和と二度引き、しかもその辞書の数も限られていたので、生徒は各々自分用の手書きの辞書を作成せねばならなかった。再び安藤の言葉を引こう。「自分などはレーフの大辞典中の露英語の訳語を対照して辞書を作り勉強した、故に生徒は斯る無益の事に時を費すを以て年数の割合には進歩はしなかつたが、然し非常に苦心せしため皆語学は達者であった。」（同右）

この当時としてはかなりハイレベルなカリキュラムを見て気づく点を挙げておこう。まず綴字でもちいられたトルストイの以呂波とは、かの文豪がヤースナヤ・ポリャーナでの民衆教育のために編んだ童話集である。また訳文のテキストとなったウシンスキーはロシアにおける革新的な教育学者であるし、イロワイスキーやソロヴィヨーフの歴史書は名著の誉れ高いものである。ミルリとはジョン・スチュアート・ミルのことであり一八六〇、七〇年代のロシアの教養人の愛読書である。さらに歴史の参考書となっているシロッセルの万国史は一八六〇年代の革命思想家チェルヌィシェフスキーが自分の思想を広めるために、検閲逃れの意味で訳出したものである。

この教科目は一八八〇―八一（明治十三―十四）年のものであるから、八一年入学の二葉亭は間違いなくこうした科目を履修したはずである。つまり露語科の生徒たちは、当時のロシアのギムナジウムでは禁止されていたような革新的な授業を受けることになったわけである。それにしても、これほど高度のカリキュラムを作成したのはだれか――語科によって差はあるが、こと露語科にかんするかぎり、メーチニコフをはじめとするナロードニキ系の教師が

それに関与したとは、十分想像されるのである。これにすでに述べた文学の授業が加われば、生徒たちがどのような思想、信条の持ち主になるかは明らかだろう。政府主導の鹿鳴館外交とそれに対抗する自由民権運動の高まるなか、生徒たちはおのずと反政府的な思想傾向を抱くようになっていっても不思議ではない。そのためであろうか、露語科の卒業生の数は驚くほど少ない。卒業生のリストを挙げると、一八七九（明治十二）年―武藤精次郎、福田直彦、加藤雅雄、八〇年―斎藤安右衛門、小島泰次郎、千葉文爾、神戸應一、同年七月―下村克己、八一年二月―成瀬駒二郎、鈴木於菟平、小島倉太郎、八二年（前年十二月より二期制を廃止し、通年制に移行）―山村栄、亀高西正平、芥川昆孝、八三年―片岡旗郎、矢崎鎭四郎、八四年―安岡盛長、川上俊彦、鈴木要三郎、加藤寅三の二〇名にすぎない。つまり当時の生徒たちにとっては、卒業という肩書よりもロシア語の修得が目的だったということだ。一八七六（明治九）年入学の矢崎鎭四郎の談によると、最初五〇人程いた生徒が卒業時には一人になっていたというから、中途退学者の多さには驚かされる。二葉亭の入学した一八八一年には募集給費生二五名にたいし、二五〇名の応募があったという。

立身出世とは無縁な露語科

メーチニコフは当時の露語科の生徒が置かれていた状況をこう説明している。

ロシア語を修得してみても、日本人学生たちには、英語、仏語（部分的には独語科にもあてはまるが）の生徒のように、前途に明るい展望が開けていたわけではないということだ。英語、フランス語の場合には、首都ではすでに高度の大学の講義がおこなわれていた。またドイツ語には、医学校への門戸が開けている。ところがロシア語には、より高度の授業がおこなわれる見込みはまったくなかった。つまり立身出世とか生活の資を稼ぐという意味では、ロシア語の勉強はほとんど魅力

あるものではなかったということだ。

（「東京外国語学校の思い出」、『回想の明治維新』付録）

旧外語の生徒名簿を見るかぎり、露語科には薩長出身者が皆無に近いということも、これと無関係ではないであろう。ちなみに第二期東京外国語学校で教鞭をとることになる教師で、旧外語を卒業したのは鈴木於菟平と小島泰次郎の二名だけであり、長谷川辰之助（二葉亭）も河津敬次郎（陸軍教授）も卒業はしていないのだ。つまり卒業という肩書よりも、ロシア語の実力が採用の基準とされたということだろう。そしてこうした知的風土のなかで学んでいたからこそ、一八八五（明治十八）年の東京商業学校との合併にさいし、多くの教員、生徒がそれに憤り、学校を去ったのであろう。

当時の外国語学校の学生は、士族出身者が過半数を占め、不平等条約のもとで日本の貿易が外国商人に独占されている現状にあきたらず、卒業後は公使や領事となって海外に雄飛しようという野心をもっており、絶えず議論をしていたから書生派と呼ばれていた。なかでもロシア語科には、当時のわが国の水準をはるかに抜くアメリカ国籍のロシア人教授グレイ（N. Gray）と個性豊かな日本人のロシア語教師、市川文吉らによって育てられた長谷川辰之助（二葉亭四迷）、平生釟三郎、藤村義苗、太田黒重五郎らの優秀な学生がいて外国語学校全体をリードしていた。矢野校長は彼らの才能を惜しんで説得につとめ、長谷川は新商業学校に再入学したが数か月で退校してしまった。

（『一橋大学百二十年史』、一九九五年、二七ページ）

と細谷新治は書いている。

五　東京外国語学校の創立

この時以来、わが国の国立の外国語学校では、ロシア語教育が一切途絶えてしまう。その間のロシア語の人材をかろうじて確保したのが、駿河台のロシア正教会の露学校であった。その後日清戦争の勝利によって、大陸への進出を画策する日本にとって、満州、朝鮮の利権をめぐって、日露両国が早晩対立することが必至となった一八九七（明治三十）年に今度は商業学校附属として外国語学校が創設されることは、通史篇で述べた通りである。同じ年に各地の陸軍幼年学校でロシア語が正課となるのも偶然ではない。第二次外国語学校は明らかに時の国際情勢に促されて創立されたわけである。

英、仏、独、露、清、韓の七語科で九月十一日から授業が始まるが、翌年には井上哲次郎、加藤弘之等が外国語学校独立の建議案を提出、国会での承認を得て、一八九九（明治三十二）年四月四日の勅令第一一八号によって、伊語科を増設し東京外国語学校として独立し、神田乃武が校長心得となる。本科三年、別科（これは速修を目的とする官立学校初の夜間部であった）二年の修業年限であった。

この年の露語科の生徒数は本科四〇名、別科一九名であった。翌一九〇〇年、文部省専門学務局長上田萬年が校長事務取扱となり、彼の推挙で外語の露語科別科生となるのが、東京帝国大学言語学科卒業の八杉貞利である。時代状況を反映して学科規程は猫の目のように変わり、一九〇四（明治三十七）年には別科が専修科と改称され、〇六年には露、清、韓語学科に修業年限一年の速成科が置かれることになる。なお先走って言うと、語科が語部と改称され、各語部に文科、貿易科、拓殖科が設けられ、英、独、仏の第二語学が置かれるようになるのは、一九一九（大正八）

年、長屋順耳校長の時代のことである。

設立当時の露語科

設立当初は鈴木於菟平が講師（以下講師という場合、非常勤講師のこと）であったが、独立と同時に古川常一郎（一八九九－一九〇〇年。以下在職期間を示す）、ヴラジーミル・ファメンコ（一八九九－一九〇〇年）が専任教授となっている。オデッサ大学出身のこのお雇い外国人は比較言語学者で、ギリシャ、ラテンの古典語にも通じており、月例となった教師親睦会では毎回アカデミックな講演をしている。たとえば「露西亜語学研究の必要なる所以を論ず」という講演の全文が一八九九（明治三十二）年の『校友会雑誌』に収録されており、そこでは英、独、仏に比べて露語の使用範囲が限定されているのは、ロシアが遅れて文明国の仲間入りをしたためであり、「日本人の如く、領土の関係上、露西亜と近接する諸国民、及び露語に通暁すれば他日露西亜帝国と多少進歩的なる通商をなし得べきと覚悟せる諸国民にとりては、露語が前途斯の如き」として、その将来性を強調し、印欧語族に占めるスラヴ語の位置を言語学的に詳述した上で、ロシア文学の重要性にも言及し、プーシキン、レールモントフにつづいて、トルストイ、ドストエフスキー、さらにシチェドリンの名を挙げ、『ゴロヴリョフ家の人々』はドストエフスキーの傑作と比べても遜色ないと断言しているのは注目に値する。一八九九年には古川の推薦で長谷川辰之助（一八九九－一九〇二年）が教授となっているから、二葉亭もこのファメンコの講演を聴いたはずである。なおこの年の授業料は二〇円、また副科と称して三年生のために経済学、国際法、教育学の三学科が新たに置かれ、志望者は一、二学科を兼修することができるとされた。ちなみにこの年の入学試験に「露西亜帝国の現況に達せし主なる事蹟を述べよ」という問題が含まれていたのは興味ぶかい。

ここでファメンコ以降のロシア人教師名を列記しておこう。括弧内は在職期間である。外語関係の資料とロシア側の記録には異動があるが、一八九九（明治三十二）年から二年間スパルヴィン（一八七二―一九三三）が非常勤講師として教鞭をとったとされている。彼はペテルブルグ大学で旧外語のロシア語教師であった黒野義文に日本語を学び、来日して、おそらく二葉亭の斡旋によって、外語でロシア語を教えることになったのであろう。彼こそはウラジオストックの東洋学院（後の極東大学）における日本学の基礎を築く人物であり、そこでは一九〇三年に外語を卒業する松田衛も教鞭をとることになり、スパルヴィンは松田や川上秀雄の協力を得て、『日本語読本』、『口語日本語読本』といった教科書を編纂している。外語を棄て、日本を棄てた黒野義文の弟子が、同じく愛弟子の二葉亭の尽力で日本語研究を発展させ、ロシアを代表する日本語学者となり、さらにのちに外語の教授となる松田衛とウラジオストックで同僚となるというのは、奇しき因縁である。

外国人教師の系譜

外国語学校の資料でみるかぎり、初代の外国人教師はパーヴェル・スムィスロフスキー（一九〇〇―〇二年）、ついでヤーコフ・ユゼフォーヴィチ（一九〇二―〇三年）、ラファエル・フォン・ケーベル（一九〇四―〇六年）、アレクサンドル・ペトロフ（一九〇六―〇九年）とめまぐるしく変わる。その後一九〇九（明治四十二）年から一九四〇（昭和十五）年までほぼ三〇年間にわたって教鞭をとるのが、ベオグラード生まれのセルビア人でペテルブルグ大学物理数学科出身のドシャン・ニコラエヴィチ・トドロヴィチである。この人物が生徒たちに与えた影響は非常に大きいが、そのユニークな授業ぶりについては後に述べることにする。彼がアメリカに去った後（トドロヴィチはカリフォルニア州パロアルト市で、一九六三（昭和三十八）年八十八歳でに亡くなっている。伝統的な日本をこよなく愛し

た人だったという）、一九四一（昭和十六）年よりアレクサンドル・パヴロウィチ・ミチューリン（職員録には米秋林、元露国人と記載されている）とポーランド系のボリス・アントーノヴィチ・ストルジェシェフスキーが同時に雇われている。

非常勤の外国人講師には、マルチン・ニコラエヴィチ・ラムミング（一九二五―二七年、後に東独科学アカデミー正会員となる彼も、黒野義文の教え子である）や、すぐれた前衛画家であり、棟方志功等とも親交があり、今祖国ロシアでその再評価が進んでいるヴァルヴァラ・ドミトリエヴナ・ブブノワがいた。ブブノワは一九二七（昭和二）年から一九四五（昭和二十）年まで教鞭をとり、ロシア文学作品、とくにロシア詩の講読を担当した。名門貴族の出であるブブノワの文学的素養と教育的情熱は、生徒たちに多大な感化を与えた。米川正夫、中村白葉などブブノワ就任以前の卒業生もロシア文学の翻訳に際しては、疑問点のチェックを受けたという。米川はその自伝『鈍・根・才』（河出書房新社、一九六二年）でブブノワの「知性と教養に魅せられ、もし自分に妻子がいなかったら、……求婚した。」と告白しているほどである。なお彼女は戦後は早稲田大学露文科でプーシキンの『オネーギン』の講義をしているが、その素晴らしさは伝説となっている（ついでながらわが国におけるバイオリンの教育の基礎を築いた小野アンナはブブノワの実妹である）。またブブノワの夫のゴロフシチコフも一九三五（昭和十）年から二年間（除村教授留学中）非常勤

ヴァルヴァラ・ドミトリエヴナ・ブブノワ

講師となっている。

ここで初期のロシア人教師について緒方整粛（明治三十六年卒）の貴重な談話が『東京外語ロシヤ会会報』第一五号（一九六七年）に載っている。それによると緒方は中野天門が参謀本部の出資で一八九八（明治三十一）年に札幌に設立した露清学校に籍を置いていたが、この学校は乱脈経営のために一年もせずに潰れ、軍は責任をとって生徒全員を東京外語に転校させたというのだ。彼の言葉を引こう。

一年生は二十五名ほどいたでしょうが、その中には荒木貞夫中尉（後の陸軍大臣）も委託生として来てました。上級生には長谷川作次、井田孝平（後のハルビン学院長）の諸氏がおりました。先生には、長谷川辰之助（二葉亭四迷）のほか鈴木於菟平、藤堂四郎、小島泰次郎（ともに旧外語出身、後二者は非常勤）の諸先生、ロシア人ははじめユゼフォーヴィチ先生でしたが、この人の帰国後は露清語学校のスムィスロフスキー氏がそのあとを引継ぎました。藤堂先生はもと外務省書記生で現地生活が長かったせいでしょうか会話がうまく、小島先生は陸大教授が本職で、外語や参謀本部にも関係しておりました。ところで例のスムィスロフスキーは漁師あがりの田舎者（実際には中野天門がウラジオストックから招いた陸軍中尉——筆者）で、黒板に何か書いて手がチョークでよごれると、ハンカチで拭くかわりにペロペロなめるような男でした。それにくらべると前任者のユゼフォーヴィチ先生はいかにも教師風の立派な人でしたが、おしいことに胸が悪かったようです……

ここではユゼフォーヴィチが前任者となっているが、これは緒方の記憶違いであろう。『校友会雑誌』（一九〇六年）によると、日露開戦前夜にユゼフォーヴィチが帰国を強く希望して退職、講師の小島泰次郎も出征命令を受けたため、欠員が生じ急遽東京大学で哲学を講じていたケーベルを雇い入れ、さらに露都留学中の八杉貞利を召還し、教授にしたとある。夏目漱石や有島武郎、芥川龍之介等によってその学識を絶賛されているケーベル博士については、改めて述べるまでもないが、この人物がたとえ一年間とはいえ、外国語学校でロシア語を教えていたことはあまり知

られていないのではなかろうか。

ラファエル・フォン（アヴグストヴィチ）・ケーベル（一八四八―一九二三）はロシアに帰化した二等文官のドイツ人の父とロシア人の母の子として、ヴォルガ河畔の商業都市ニージニイ・ノヴゴロドで生まれており、母語はロシア語である。モスクワ音楽院ピアノ科に学び、チャイコフスキーやルビンシュテインにも習っている。その後ドイツに留学して、イエナ大学、ハイデルベルグ大学で哲学を専攻する。この時ベルリン大使だった青木周蔵の依頼で、ハルトマン教授の推薦を受け、東京大学に一八九三（明治二十六）年に着任し、哲学の講義を担当することになる。ケーベルは上野の東京音楽学校でも教えていたから、外国語学校は兼任だったのであろう。

日本人教師たち

つぎに日本人教授陣を列記しておこう。括弧内は在職期間を示す。二葉亭につづいて鈴木於菟平（一九〇二―二三年）、八杉貞利（一九〇三―三七年）、北島常晴（一九〇八―一九年、明治三十七年卒）、松田衛（一九一九―四二年、明治三十六年卒）、松永信成（一九一九―二一年、その後大阪外語に転出、大正三年卒）、除村吉太郎（一九二四―四〇年、大正七年卒）、佐藤勇（一九二八―六五年、大正十五年卒）が専任教員、ほかに非常勤講師として前出の小島泰次郎、藤堂四郎（旧外語）、河津敬治郎（旧外語、

北島常晴（初等文法の授業の厳しさで有名）

一九〇八―二九年、陸大教授）、藤平文蔵（明治三十三年卒）、穂積永頼（東亜研究所、明治四十一年卒）、馬場哲哉（大正三年卒、ロシア文学者江川卓の父、筆名外村史郎）、奥村泉（大正九年卒、幼年学校教授）、井桁貞敏（昭和四年卒、海軍兵学校教授）、中村長三郎（白葉）（明治四十五年卒）が教鞭をとっている（以上着任順）。

それでは明治三、四十年代の露語科の授業内容はどのようなものだったか？　前述のとおり三年制で専攻語は週二四時間（ただし五〇分授業）、体操三時間、二年次から志望により英語を兼修することができるとあるから、まさにロシア語漬である。また最終年次では「正科語学の教授時間内に於いて当該国の文学の大要を教授す」と定められていた。旧外語のように、詳細なカリキュラムや教科書名は記録に残っていないので、授業内容については、当時の生徒たちの証言によるほかない。

教授時代の二葉亭

まずは教授時代の長谷川二葉亭の授業風景を清水三三（後のハルビン学院教授、明治三十六年卒）の回想によって再現してみよう。

明治三十三、四年の事であるから、もう今から半世紀も前の話しであるが、私は東京外語在学中二年間、長谷川先生に露語の授業を受けた。

先生は始業のベルで教場に這入ると、デスクを前にして、あの渋い厳めしい面貌を以て椅子にすわり、先ず眼鏡を外してハンカチで拭き、更にこれを掛けてから生徒の出欠を取り、それから生徒の方に向き直って鉛筆の尖きで一々生徒の頭数を数えて出欠簿の数と照らし合わせ、そして後、名講義に入るのである。先生の講義は生徒に取っては実に分秒といえども貴いもので、講義の始まる迄の待ち遠しいこと、もどかしいことと云ったら譬えようがない。生徒は一同固唾を呑んで講義に

聴き入り、授業の終わりを知らせるベルの響きはいつも我等に、ああ惜しいという嘆声を心の底から絞り出させた。

生徒が教場で習っただけの言葉は自由に使いこなして活用出来るようにすることと、一年生の時に訳読の上で文法を頭に叩きこむ（文法の時間は無論別に定めてあったが）ことが先生の授業の方針であって、其講義は微に入り細に亘り、反復丁寧を極めた。従って進度は遅い。一度講義したところは次回には先生が之を応用して露文を作って来て、露語で質問し、露語で答えさせた。或時、先生は生徒に、「君等は毎日何時間位勉強するのか」と訊ねられた。これに対し、生徒は二時間とか三時間とか各自答えたが、先生の言われるには、「私はこの一時間の授業を準備するのに今朝の一時までかかった」。斯様に先生の授業振りは実に熱心であったので、其講義の言々句々は直に生徒の血となり肉となって活用することが出来た。露国文豪の作品を講義するときには、言葉の上に現れた作者の書いた心持ちを伝えることに殊に骨折られた。先生が語句の意味を生徒に質問し、生徒が之に答えたとき、「ああ当たった、当たった」とか、「それより、もっと強い意味だ」とか「それでは強すぎる」など言われた。また或時は、先生が文中の一句を捉え、「実に千古の名文だ」など言いながら深く感に打たれた面持ちで、教室内を往きつ戻りつした有様は今尚眼前に彷彿している。

（「恩師二葉亭四迷の想い出」、『ソ連研究』、一九五二年八月）

二葉亭四迷（明治41年冬　ペテルブルグにて撮影）

あまりに引用が長くなってしまったが、外語時代の二葉亭についてこれ以上に生彩のある描写を筆者は知らない。それにしても教師としてなんたる徹底ぶりであろうか。現在二葉亭の墓は奇しくも西ヶ原キャンパスのすぐ隣の染井霊園にあるが、これは二葉亭の十三回忌に同窓生と教え子たちの寄付によって建立されたものである。僅か二年の在職にもかかわらず、こうし

二葉亭四迷の墓（書は宮島大八）

たことが起こりえたのも、二葉亭の教育者としての情熱が生徒たちに強烈な感化作用を及ぼしたことの証であろう。

しかも二葉亭は単なる語学の授業では満足せず、憂国の士としてロシアの国情研究の必要性をも生徒に訴えていた。古川常一郎の病気退官後、露語科主任となった二葉亭は、「語学校の方も、近頃は主任という重荷を背負わせられ終日学校の事にのみ齷齪たる有様、大いに閉口致居候」と坪内逍遙に嘆いている。「氏の本領は小説家でないと同時に、一介の語学教師に止まらず、早くから露国に押渡って何か実業の方面に雄飛しようと言う野心があったので、是は当時露語を研究した連中が総て抱いていた野心で我々とも其点に於て話が善く会って居た」と同僚の鈴木於菟平も語っている（『忠実なる教師』）が、この点は大陸進出をうかがっていた軍部とは目的は違っても、当時ロシア語に携わる者にある程度共通した認識であったことは、銘記する必要があるだろう。結局二葉亭は外語教授の職を捨ててしまう。その理由は必ずしも定かではないが、こんな証言がある。「海外留学生の選定に就いて校長高楠氏と意見が衝突したのが近因であったが、日頃、校長と教授方針を異にしたのが、偶々留学生問題で爆発したものといった方が適切であろう」（横山源之助『真人長谷川辰之助』）

ここで言及されている留学生問題とは、二葉亭がその才能を高く買っていた教え子井田孝平（後のハルビン学院初

代院長）ではなく、八杉貞利が抜擢されたことで校長と衝突したとされている（事の真偽は定かではないが、ハルビン学院ではこの一件は伝説になっていたという）。その後の外語における八杉の功績を考えると、二葉亭の人選が必ずしも正しかったとは言えないが、ただ日露戦争勃発と同時に第一軍に通訳として志願したのが井田であることを考えると、国士としての気概という点で両者が意気投合していたとは想像できそうだ。

六　明治期の露語科の授業内容

驚くべきグレーボフの文法書

当時使用された文法教科書はグレーボフ著、岩沢丙吉訳の『露西亜文法』であった。今では知る人も少ないこの教科書の著者セルギー・グレーボフは一八八八（明治二十一）年に来日した露国公使館付司祭であり、岩沢丙吉はニコライ堂附属神学校を卒業、ペテルブルグ神学大学へ派遣されて神学士の学位を取得、一八八八年に帰国して神学校教授を務めていた（岩沢は後に陸軍士官学校教授となり、一九三五（昭和十）年退官、四三年に八十歳で死去した）。

一八九八（明治三十一）年に初版が出たこの教科書は前編形態論、後編文章論からなり、各課のすぐ後に練習用例文とその和訳をつけたもので、菊判四三二ページの大冊であった。前編では不規則変化の稀用の名詞、動詞まで網羅的に細大漏らさず取り上げられ、詳細周到な説明が付けられている。活字はすべてウラジオストックから取り寄せたものであった。

一九〇一（明治三十四）年に出た第二版『改訂増版露西亜文法』では、一行の字数、一ページの行数を増やし、活字も五号と六号を併用し、さほど重要でない事項は六号活字で組み、練習問題とその和訳は一括して後に回してある。

練習問題の量もきわめて多く、例えば形容詞、副詞の比較級の問題だけでも一三五題ある。ページ数は文法篇三〇五ページ、練習問題一一〇ページ。第二版ではさらに訳読用の露文テキストとその和訳など、一六〇ページが追加され、総ページ数は菊判五七七ページとなった。これは当時の日本において訳読用教材の入手がきわめて困難であったという事情によるものと思われる。なお一九三二（昭和七）年に出た新版では書名も『岩沢丙吉訳グレーボフ露西亜文法』と改められ、新正字法についての脚注が付けられ、巻末の訳読教材はことごとく削除され、代わりにロシア語の諺と名句が二〇ページ、文法篇で用いられた単語のほかに若干の新語及び革命後の略語を加えた七、〇〇〇語の小辞典一一八ページが添えられた。これはこの時期、訳読教材の入手が比較的容易になったことと、信頼すべき露和辞典がまだなかったことへの考慮からでたものと思われる。

一九〇一（明治三十四）年版の緒言において原著者グレーボフは、この文法書の使用に当たっては、重要なものを最初に学習し、さほど重要でないものは後に回し、さらに細密な規則などは露語一般に通じた後で履修するよう指示している。一九一〇（明治四十三）年入学の大谷二郎（満州黒河副領事）は、「その頃はロシヤ語の本と云えばグレーボフ文典とルスカヤ・レーチ第一巻だけで、後は全部コンニャク版の刷物を分ち与えられた」と回想しているが、この文法書は一九一六（大正五）年に八杉貞利の『露西亜語学階梯』が出るまでなんと一五年以上にわたって使用されたわけである。

八杉貞利の功績

ここで話を戻し、名実ともに第二次外語露語部の精神的支柱となった八杉貞利のことを述べておく。八杉は一八九七（明治三十）年東京帝国大学文化大学博言学科（一九〇〇年言語学科と改称）に入学、在学中すでに国語学、国文

学について数々の論文を発表、言語学についても幾つもの訳書、著書を出す一方、上田萬年に従ってアイヌ語の現地研究に従事、さらに一年上級の新村出とともに先輩を説いて日本言語学会を創立し『言語学雑誌』を創刊、雑誌『帝国文学』の編集にも参加し、自身もこれに小品を発表、歌人としてもまた名をなしていた。

一九〇〇（明治三十三）年七月恩賜の銀時計を拝受して東京帝大を卒業した八杉は、当時文部省学務局長兼東京外国語学校校長事務取扱であった恩師上田萬年の指示に従ってロシア語学研究の道に進むことを決意、同年九月外語露語科別科に入学、〇一年十月、文部省から露国留学を命ぜられ、〇二年一月（露暦三十四年十二月）ペテルブルグに到着した。ペテルブルグ大学ではボドゥエン・ド・クルテネー教授の言語学概説を聴講、その自宅での私的な講義にも出席した。

八杉貞利

一九〇三（明治三十六）年、在露中に外語教授に任官、翌〇四年二月、日露開戦により急遽帰国して五月から教壇に立った。この時まだ二十八歳の少壮教授であった。一九一〇（明治四十三）年に入学した山中忠雄は「当時の教授陣は鈴木於莵平、八杉貞利両先生、講師は河津敬治郎（陸大教官）、トドロヴィチ両先生であった。このなかでいちばん授業時間を多く持っておられたのは八杉先生で、訳読、文法、作文、新聞等々、殆ど全科の半分ぐらい担当されていた。文法はグレーボフの大文典であった」と回想している（戦後『ロシヤ会会報』第二三号）。

一九一一（明治四十四）年、八杉編の『クニーガ・ド

リャ・チチェーニヤ』が出る。これはペン字書き草書体の原稿を凸版印刷したもので、布装二〇〇ページ、東京外国語学校発行となっている。これは基礎文法の学習を終わって本格的な文学作品などの講読に移る前の中間段階の教材であり、おそらく八杉はグレーボフ文法の付録の訳読教材の内容に飽き足りなかったのであろう。これは後の『八杉初等露語読本』の基礎となる。

講読したテキストを次の時間の冒頭で生徒に一節ずつ輪読式に暗唱させるのが八杉の教育方針で、この暗唱を重視する教育法は後述するトドロヴィチによっても採用され、以後八杉教授在任中、一貫して実行された。また和文露訳については一九一一（明治四十四）年卒業の宮村時一郎が和文問題と露文解答を清書した貴重なノート三冊（本学図書館蔵）を遺している。八杉担当の二学年一冊、鈴木、八杉担当の三学年各一冊で、和文には国際政治、経済、外交、利権交渉等、時事問題に関するものが多い。八杉は随所で同義あるいは類義の動詞、および固定した語結合を一括提示してその用例を示している。指名された生徒が黒板に解答を書いている間に、生徒一人一人の机を回って、その露文を個別に点検、批評、添削するという徹底した教え方だったという。

一九一五（大正四）年に入学した除村吉太郎は「外語を出て五十年」のなかでこう述懐する。

一年の時はロシヤ語の時間が週二十一時間もあった。初等の読本を終えると、一年の後半から文学作品の廉価版を教科書にして、十九世紀の諸作家ととりくんだ。鈴木於菟平先生はプーシキンの「発射」（神西君はのちに「この一発」と訳したが）と「大尉の娘」、八杉先生がトルストイの「イヴァン・イリイチの死」とプーニンの「喘息」、北島常晴先生がゴーゴリの「外套」、河津敬治郎先生がトルストイの「セヴァストーポリ」をやってくれた。その他にもロシヤ史の本、世界地理の本、あるいは『ピョートル大帝伝』といったようなものもあったが、いちばん力を入れて読んだのは文学作品であった。

（『ロシヤ会会報』第一五号、一九六七年）

今と違って五〇分授業にしろ、大変な量のテキストである。だがこれが露語部の教育の基本方針であった。基礎文法と初等読本を終えた段階で、文学作品は担当教師の文学的素養の有無や生徒の資質によって、授業の内容に多少の差異があり得たとしても、生きたロシア語の原文に接し、文法知識を補い、読解力を高めるための絶好の教材であった。文学作品を語学教育の中心に置くという旧外語の伝統は継承されたわけである。

その後一九一六（大正五）年に『露西亜語学階梯』が出、九年後の一九二五年には新正字法による『改訂露西亜語学階梯』となり、動詞変化一覧、会話材料などが増補され二九〇ページとなったこの教科書は、戦前、戦後を通じ、簡にして要を得た最高の入門書として全国で広く用いられた。

アレクサンドロフの露英辞典を和訳した『新譯露和大辞典』（鈴木於莵平、八杉貞利、松本圭亮共訳）が出たのは一九一九（大正八）年で、語数五万語余、新書版で一、六五七ページの大冊で、辞書がなくて苦労していたロシア語学習者にとっては一大福音であったと想像される。八杉貞利編の露和辞典が出るのは、一九三五（昭和十）年のことである。これは見出語数の多さ、例文の豊富さにおいて、またすべての語にアクセントを付け、その変化形を明示した点で、従来の露和辞典をはるかに凌駕する画期的なものだった。この辞書は以後四半世紀にわたり、国の内外のロシア語学習者、ロシア、ソ連研究者にとって座右の書となった。

八杉は一九三七（昭和十二）年三月停年退官し、名誉教授の称号を受けるが、なお非常勤講師として一九四四年三月まで教壇に立った。一九五〇（昭和二十五）年に日本ロシヤ文学会が創立され、八杉は会長に推挙されている。八杉の著作はロシア語学以外に言語学、ロシア文学（『詩宗プーシキン』［一九〇六年］をはじめ多くの翻訳もてがける）にもおよび、とてもここで列挙するゆとりはないが、『岩波ロシヤ語辞典』（一九六〇年）は畢生の大事業である。この時八杉は八十三歳、この業績により一九六一（昭和三十六）年に朝日賞を受賞、また六四年にはかつて彼が学ん

だレニングラード大学から名誉博士号を贈られている。

鈴木於菟平と沿海州への修学旅行

順序が逆になったが、明治・大正期の露語科の名物教授として生徒たちに慕われた鈴木於菟平のことに触れておかねばなるまい。彼は旧外語に一八七四（明治七）年に入学しているから、二葉亭より七年先輩にあたり、卒業後実業家を志し、沿海州とりわけニコラエフスク（尼港）に長く暮らし、ペテルブルグにも滞在してニコライ二世に拝謁したこともあるというから、ロシア人の知己も多く、明治期きってのロシア通のひとりといってもいい。一九一九（大正八）年卒の松田正綱は書いている。「先生が露語を話しているのを聞いていると、ロシア人が話しているのかと思うほど見事な発音と語法で、所謂『パ・ルースキー』とはこれだと思わされたものだ」（『ロシヤ会会報』、第二五号、一九七九年）。短軀で小肥り（生徒たちはボーチカ、樽とあだ名していた）、笑顔を絶やすことのない温顔で、この点、長身痩軀、謹厳実直な学者型の八杉貞利とは好対照をなしていた。ロシアでの体験談を話すのが得意で、それを知って予習をしていない生徒たちが、「先生、今日はロシアのお話を……」と言うと、「にこにこしながらロシアのお話をしてくださったオヤジのような先生」（同右）で、麹町区竹平町の旧校舎の正面入口の脇に台柱にのった胸像があった（戦時中の金属供出で撤去）というが、それだけ生徒のあいだで人望があったということだろう。

そして鈴木教授を語る場合に忘れてならないのが、一九一〇（明治四十三）年の沿海州への修学旅行である。この年の夏休みを利用して、露語科の生徒一四名が鈴木教授の引率のもと、七月十日から八月六日まで、ニコラエフスク、ブラゴヴェシチェンスク、ハバロフスク、ウラジオストックを訪問、各地で熱烈な歓迎を受けたのだった。日露戦争終結後五年目にしては画期的なこの大旅行を実現させたのは、ひとえに鈴木の大陸的な性格と彼の極東ロシアにおけ

鈴木於莵平

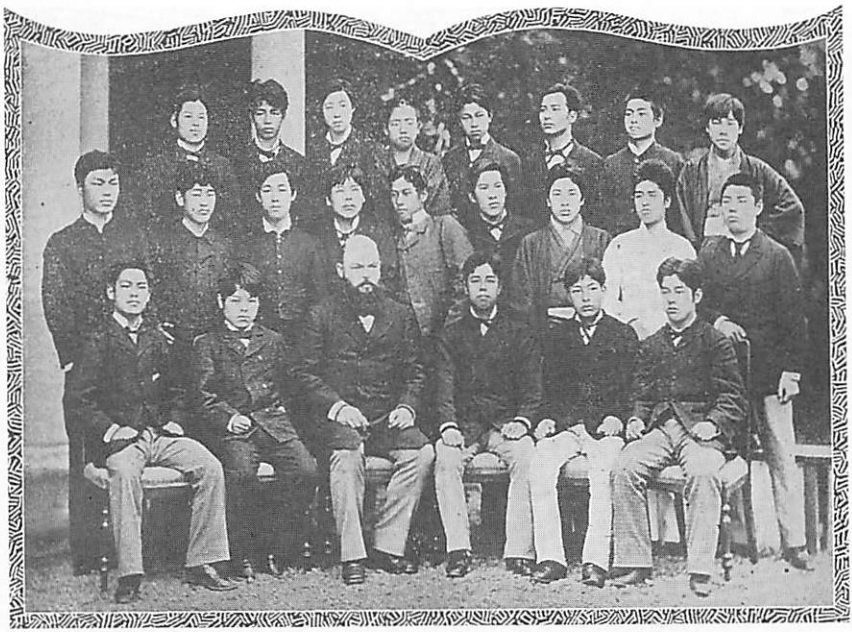
る豊かな人脈であろう。東京外国語学校の一行がニコラエフスクを最初の訪問地としたのには理由があった。学生たちの船賃も食費も一切面倒をみることになる島田商店の根拠地だったからである。島田商店の社長島田元太郎は、ロシア移民の草分け的存在で、十六歳でロシアに渡り、漁業関係の仲介業者として財を築き、その地では「在留邦人中のキング」、「ニコラエフスクの総督」とまで呼ばれた人物である。島田商店の繁栄ぶりは、当時独自の紙幣まで発行していたことからでも察せられる。ちなみに島田の長男島田弘毅は一九二四（大正十三）年に露語科を卒業している。また緒方整粛（明治三十六年卒）は外務書記生として当市にあり、さまざまな斡旋役を買って出た。

沿海州、シベリアと外語露語科

この一九一〇（明治四十三）年の『校友会雑誌』の「露語科卒業生の消息」を見ると、まるで日本海が内海であるかのように、函館、敦賀と極東ロシア各地に多勢の卒業生が、外交官、商社員（とくに三井物産）、軍部通訳、教師などとして配置されており、その数と外語出身者の占める割合は今日では想像も出来ないほどである。とりわけウラジオストック（浦潮）における外語出身者の活躍には目を見張るものがある。この港町には日本の貿易事務館が早くから置かれ、そこには旧外語の卒業生川上俊彦（としつね）が、第五代目の貿易事務官として、日露戦争まで勤務していた。外交

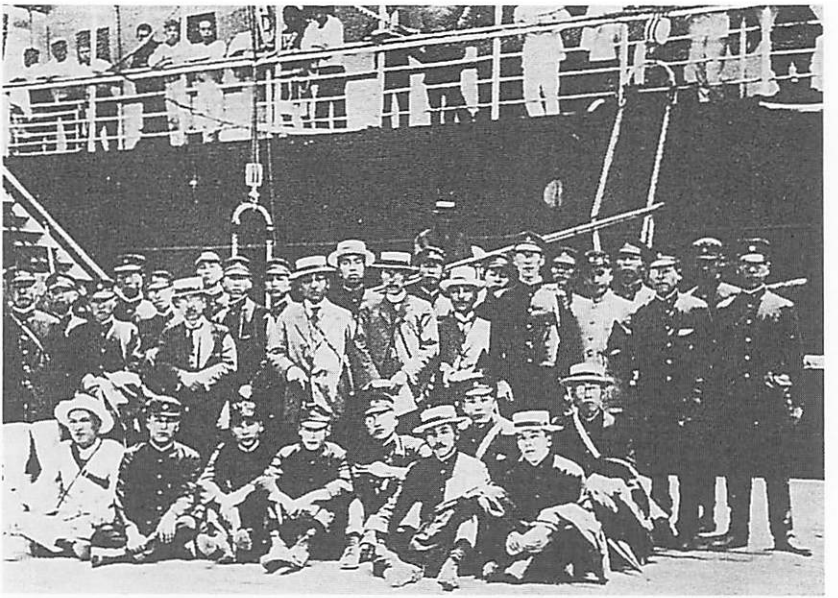
官として在ハルビン総領事、在モスクワ総領事、満鉄理事、在ワルシャワ特命全権公使、北樺太鉱業会長、日魯漁業社長を歴任した川上は、日露開戦時に居留民の引き上げを指揮し、水師営での乃木、ステッセル会見の通訳を務めた人物であり、旧外語と第二次外語との橋渡し的役割をになっていた。ちなみに彼が発起人となった旧外語の露語科同窓会は、恩師コレンコの名をとって瑚璉壷会と名付けられていた。彼の筆になる『浦潮斯徳』（一八九一年）という七〇ページの小冊子は、この町に関する最新情報を隈なく伝えるものである。わが国のロシア情報は欧米、とりわけ英語文献によって入っていたきらいがあるが、この川上や村松愛蔵（「露国事情」、「外征紀行」『扶桑新聞』掲載）らロシア語を学び、あるいは旅行で、あるいは勤務でロシアに滞在したものによってもたらされた情報は当時としては非常に貴重なものであり、陸軍参謀本部によっても注目されていた。しかも興味深いのは、日露戦争を挟んだ時期にはモスクワやペテルブルグといったヨーロッパ・ロシアではなくバイカル湖以東のシベリア、極東地方に圧倒的に日本人が居留しており、したがってロシアに関する情報も中央からの公式のものというより、辺境からの生々しいものだったということである。

前述の井田孝平と同期の和泉良之助（明治三十四年卒）のように一九〇七（明治四十）年にこの町に渡り、居留民会の幹事の傍ら同会に付属した夜学の露語学校を開き、数十名の卒業生を出す一方、日本語雑誌を発行して経済上の日露の接近を図る者もいた。またハルビンには北満州における唯一の日本語新聞である『北満洲』主筆で、露国事情を日本人に知らせるだけでなく、同名のロシア語紙をも発行し、日本を研究するロシア人に日本事情を伝えた布施勝治（明治四十年卒）のようなジャーナリストもいる。彼こそはのちに毎日新聞のモスクワ特派員として世界ではじめてスターリンの独占インタビューに成功した人物である。この鈴木による極東旅行が引き金となって、露語科の学生が毎年のようにシベリア、満蒙などを個人、あるいは集団で旅したことは、『校友会雑誌』に毎号のように載った紀



前列向かって右より桑原謙蔵、中澤房則、川上俊彦、コレンコ、鈴木要三郎、田中達三郎。中列・太田黒重五郎、鳥居忠恕、奥野廣記、鳥山頼二、遠藤雅太郎、平生釟三郎、室田百一郎、小久保寅三、長谷川辰之助。後列・鳥越儀助、前田銀次郎、佐波武雄、杉浦龍吉、和田午吉、青柳尚香、藤村義苗、片岡長太郎。明治17年7月教師コレンコ帰国及び川上俊彦、鈴木要三郎、小久保寅三、三名の卒業記念のため旧外国語学校玄関前において撮影

行文からも分かる。時代は下るが、一九一九（大正八）年に鈴木、八杉両教授に引率されたシベリア旅行は、そうした前例があってはじめて可能となったのであろう。すでにロシア革命が勃発して二年ちかい歳月が経過し、日本をはじめとする干渉軍がシベリアに出兵している最中であり、またロシア国内は内戦も終結せず、とくに中央から遠く離れたシベリアではコルチャーク、セミョーノフといった反革命白衛軍政府、さらにはいくつものパルチザンが各地で決起している渦中である。たとえ軍部による警護があったにしろ、二七名の学生を引き連れて（この中には外語会の中心的役割を長く務め、先頃亡くなった後藤篤［大正九年仏語卒］も参加していた）ウラジオストック、



大正8年7月10日、シベリア旅行団一行（敦賀にて、船は台中丸）。中央八杉貞利、その左鈴木於莵平、その左島本愛之助

ポグラニーチナヤ、ハルビン、チチハル、満州里、チタ、イルクーツク、チタ、ハルビン、大連というコースを旅行することは並大抵のことではできない。八杉貞利はこのときの模様を『貝加爾（バイカル）日記』として克明な日記を残している。和久利誓一監修の八杉貞利日記『ろしや路』（図書新聞双書、一九六七年）に収められたこの日記には、「広漠万里の無人境に僅かに二、三師団の兵を出し、寒村に五十、百の守備隊を置き、少しく団結せる敵来れば、忽ちにして全滅の厄に遭う。而して『コルチャク』軍はしきりに敗退の報を伝え、『セミョーノフ』軍は或は故意か、之が救済に赴かんともせず。西比里亜出兵の甚しく無意義なるを感ぜざるを得ざるなり」（七月二十二日）といった率直な記述もあり、八杉の冷静な観察が随所に見られ、この時期のシベリアの混沌とした状況を知るための第一級の資料となっている。

七　日露戦争とその後の露語科

通訳として活躍する外語勢

すでに触れたように日露開戦（一九〇四［明治三十七］年）とともに第一軍の通訳となったのが井田孝平、第二軍には清水三三、またのちに外語教授となる松田衛（明治三十六年卒）は三菱を辞め奏任通訳官としてロシア語、中国語の通訳を務める。後に助教授となる北島常晴（明治三十七年卒）は近衛歩兵少尉として出征、鴨緑江の最前線で副官を務めている。講師で陸大教授の小島泰次郎は出征し奉天で病没している。しかしそれだけの人数では足るわけもなく、ロシア語の場合は旧外語の卒業生十数名を徴用し、それでも足らないので七月卒業のところを、文部省の許可を得て三月二十三日に露清韓各語科の卒業試験を行うと同時に、校則を改め軍事通訳になるもののための特別措置を講じた。第一に六月十五日から八月三十日まで露清両科の講習会を行い、清語科一二九名、露語科一八名が受講、露語科は夏期休暇を廃止している。最初の半年で一〇〇名以上の通訳を出していたが、清語科では二、三年生の優秀なるものを通訳とし、露語科では急を要したため、十一月二日に第二回目の繰上げ卒業試験を行っている。さらに翌一九〇五年の一月に旅順が陥落すると数万の捕虜が松山をはじめ日本各地の捕虜収容所に送られてきたため、二年生からも通訳を出し、それでも足らずに一年生まで実習生の名目で各収容所に派遣されることになる。また外語構内に特別室を設けて、教師、生徒一丸となって捕虜数千名の書類を翻訳したというから、とても通常の授業は出来なかったであろう。ところが繰上げ卒業で生徒数に空きが出来たため、なんと生徒募集を三か月繰上げて、四月に入学試験をしたというのだから驚異的である。前述の松田によれば、現地で調達した通訳は床屋や大工、職人といった連中が多

かったため、軍隊ではあまり役に立たなかったそうだ。

日露戦争と外語の関係を考えるとき、思いの外重要な働きをしたのは、捕虜収容所の年若い通訳たちだった。ロシア人捕虜七万二、四〇八人が全国二九の収容所に入れられたのだから、大変な数である。しかもこれは一八九九年に俘虜の人道的扱いを決めたハーグ条約の最初の適用例であり、日本側はこれを忠実に守った。市の人口の六分の一にあたる六、〇一九人を収容した松山では、ロシア通の安藤謙介知事の指令により、ロシア人捕虜はかなり厚遇されている。数々の慰問や観光旅行、さらには学校を開いて捕虜同士がロシア語やポーランド語を教えるといったケースまであったという。『校友会雑誌』（一九〇六年）には外語から派遣された捕虜通訳のリストがある。「九州方面に鈴木尚三、十時惟親、新井三郎、三ケ尻邦彦、酒井醇、石井良直等の諸氏、大阪、姫路、松山付近に太江久太郎、秋元義親、村田乙三郎、竹内秀三、大倉勲夫、鈴木相之助、八木明盟、伊崎千秋等の諸氏、高崎仙台方面には島田嘉一郎、近藤寶五郎等の諸氏が居て……」といった具合。しかも皮肉なことに、出征通訳よりもはるかにロシア語を使う機会が多かったため、捕虜通訳の会話能力は格段に進歩したという。出征通訳は大戦時こそ仕事はあったものの、それ以外は暇を持て余し、語学力を落とさぬように、定期的に通訳同士が集まって語学の練習をしたという。それはともかくこうした外語出身者の努力の甲斐あって、日露戦争以後ロシア人の間での日本イメージは非常に高まるのである。

前述の極東旅行もこうした友好的な雰囲気があったからこそ実現したのであろう。そればかりではない。一九〇九（明治四十二）年以降、毎年ハルビン、ハバロフスクから主として学生からなる四、五〇名のロシア人旅行団が東京を訪れている。観光団到着の日には授業はすべて休校となり、教員、生徒全員が新橋駅に出迎えるならわしになっており、小石川植物園で、日露学生交歓会が開催されたのだった。ロシア側はロシア民謡やバラライカの演奏、コサックダンス、日本側からは剣舞や太神楽の余興が恒例となっていた。その後日露両学生が手を取り合って、園内を散策、

談笑し、最後の立食パーティーでは鈴木教授の見事な挨拶や生徒によるスピーチがなされた。この歓迎会には学校だけでなく日露協会からも財政的援助があったようで、校長はじめ非常勤をもふくめた露語科の全教員、それに日露協会からも来賓が出席していた。また鉄道省がこうしたツアーを企画したこともあり、外語の生徒は無料で通訳のサービスをしたという。しかもこうしたロシア観光団が一九一七（大正六）年の革命の年まで毎年来日していたという事実は、今日ほとんど忘れられているのではあるまいか。日露戦争以後ロシア革命にいたるまでの日露関係が、友好的なものだったことを物語るエピソードではある。

露語科の文学的風土

外語の授業内容が文学作品の講読を主体にしていたことはすでに述べた。こうした知的雰囲気のもとで米川正夫、中村長三郎（白葉）のようなすぐれたロシア文学者が育っていくのである。一九一〇（明治四十三）年の露語科には「露西亜文学会」と「氷山会」という二つの学生サークルがあったと山中忠雄（大正二年卒）が証言している。

当時、二年生には宮川先輩をリーダーとする氷山会（弁論部）と、中村長三郎、米川正夫両先輩の主催する「露西亜文学会」の二つのグループがあった。われわれ新入生はその入会勧誘を受け、この二つのグループに入会した。氷山会は隔週土曜日午後例会があり、トドロヴィチ先生も顧問格で指導され、発音やゼスチュアなどに多いに寄与するところあり、特に語劇祭の場合など恰好の練習場、われわれ二年生の時、演出、好評を博したゴーゴリの「検察官」の舞台裏でもあった。……文学グループの方は八杉先生が協力され、放課後随時、教室で会合が催され、中村、米川両先輩からトルストイ、ドストエフスキー、チェーホフなどの作品や、生活ぶりなど聞かされ興味深いものがあった。中村先輩は商業学校出身であったが文章のベテランで、当時すでに文壇から嘱目されていた。二学期に入ると雑誌露西亜文学の創刊が計画され、われわれもその準備に加勢させられた。……菊判、百ページぐらいで、一部二〇銭だったと思う。一同持ち回って宣伝につとめたが好評で

新聞にも紹介記事が出た。

（『ロシヤ会会報』、第二四号、一九七八年）

中村自身の回想によれば、この雑誌は谷崎や和辻ら帝大生を中心とした第二次『新思潮』、秋田雨雀等早大系の『劇と詩』の向こうを張って、事実なかなか評判になったらしく、六〇〇部が完売になったという。しかしこの出版活動にたいする上級生の反応は意外に冷たく、同人たちも徐々に抜け、結局米川と中村の個人雑誌になってしまったようだ。そんなふたりが文学を志すうえで精神的に支えてくれたのが、少壮教授八杉貞利だったと中村は述懐する。

しかしロシア語教育者としての八杉の心境は複雑だったろう。当時神保町の三省堂近くの倶楽部の二階が露西亜会の会場と決まっていて、雑誌が出た直後でもあり、熱狂した文学青年たちは、『詩宗プーシキン』（時代思潮社、一九〇六年）の著作まである八杉に、文学に関する講演を注文した時のエピソードが残っている。

処が意外、八杉教授は純文学の研究は大学の文科と云った方面に之を求むべく、語学校で習得すべき語学の目的は校則第一条に示す実務に適する語学の知識養成を目的とするとある如くそれを基礎として海外に雄飛活動すべき士を養成する点にありと暗に文学愛好熱に浮かされて有頂天の連中に冷水三斗と云う処を浴びせられ、我徒海外雄飛組はトテモ痛快を覚えたものです。当時今の如く文科とか拓殖科とか云った区別はなかった折でもあり、文学者として許されたる八杉先生でも教育者たる立場にあって外語出身者の向うべき道を指示されたことは卓見と云わねばならぬと我徒は更に感嘆したものです。

（大谷二郎、前掲誌）

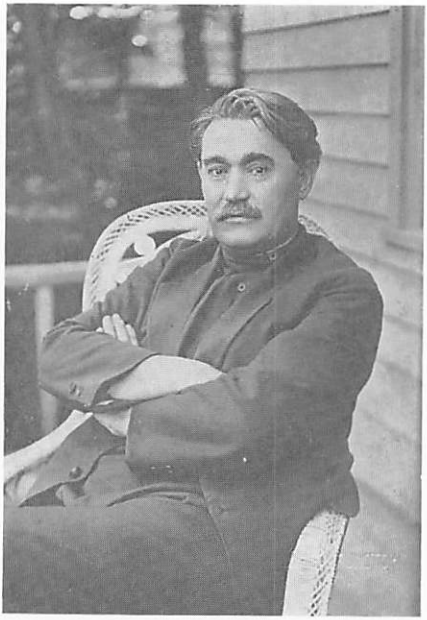
この八杉の発言のどこまでが本心かは分からないが、文学にも造詣の深かった彼には、文学の厳しさが痛いほどわかっていたはずである。だからこそ雑誌の成功に浮かれている連中に釘をさす必要があると考えたであろう。卒業直前に米川と中村を特別に呼出し、東大の選科に入ることを勧めたのは、この二人には文学的才能があると認めたからだろう。堅苦しい校則など持ち出したのは、生徒の手前であり、また実用語学といっても言語学者の八杉が大谷たち

と同じレベルの語学を念頭に置いていたとは思えない。さもなければ八杉がトルストイやプーニンといった格調高い文体の作家を教材に選ぶわけもなかろう。

八杉は語学教育に関しては厳格な態度を崩さなかったが、文学を志す才能ある学生には協力を惜しまなかったようで、和久利誓一の調査によると、詳細は不明だが大正の初期に富士辰馬による第二次『露西亜文学』が、また一九二一（大正十）年から二四年までに蔵原惟人主宰の第三次『ロシヤ文学』が二〇号も出ていたという。そしてこの雑誌には八杉自らグリボエードフの『知恵の悲しみ』、シチェドリン『ある町の歴史』、『県物語』などを載せているのである。なおこの雑誌には馬場哲哉、松永信成、鳴海完造、丸山政男、河野通弘、永田広志等が参加しているのである。一九二一年というと、すなわち新経済政策（ネップ）のはじまる年であり、新生ソ連ではいわゆるロシア・アヴァンギャルド運動が展開される一方でプロレトクリトに代表されるプロレタリア文学が台頭する時期でもある。そうした混乱期にあえてロシア文学の古典とされる作品を翻訳するところに、時流におもねることのない八杉の気骨が感じられる。

トドロヴィチと語劇

ここでもう一つのサークル「氷山会」の指導をしたトドロヴィチについて述べておかねばならない。一九〇九（明治四十二）年に八杉の招請でハバロフスクから着任し、一九四〇（昭和十五）年まで三一年間、外語で教鞭をとった彼は発音に実に厳しい教師であった。一年生の一学期は個々の母音と子音およびその結合の練習のみで、特にyとbl の練習には、鉛筆を口の中に突っ込んだり、鏡とピンセット、鏡と鉛筆を携行させたという談話も残っている。二学期以降は会話のテキストを予め暗記させ、生徒ふたりずつ組にして次々に会話をさせ、発音とイントネーションをチ



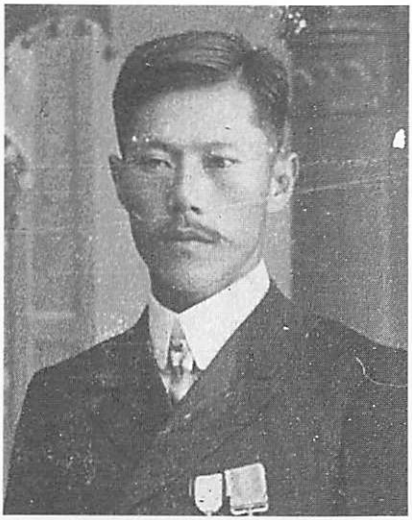
トドロヴィチ

ェックした。また二年、三年では地理、歴史も教えたが、これもテキストをすべて暗唱させる方針を崩さなかったという。しかしトドロヴィチの最大の功績は、語劇をロシア語教育の一環として組み込んだことであろう。今日と違って、語劇は最上級生の授業として扱われ、一学期から全員に台本を暗記させ、会話形式で発音を矯正していく。配役の決定は秋以降で、個別演技指導は指の動かし方、足の運び方、女の泣き方と徹底しており、残った生徒には自由作文を課して、これを点検、添削したという。また衣装はトドロヴィチ夫人が担当してくれた。他に娯楽が少なかったとはいえ、外語の語劇祭が東京中の名物として、多くの観客を集めた陰には、このトドロヴィチのような熱心な指導があったからだろう。外語の語劇祭が一体いつ始まったのかは、定かではないが、一九一〇（明治四十三）年には米川や中村が制服姿でドラマの台詞を繰返し練習させられていたと、前述の大谷は回想している。少なくとも翌一一年には公使館から衣装を借り、「検察官」を上演したことが分かっている。とまれこの暗唱式の授業と語劇は、旧外語の朗読形式の授業とならんで、東京外語露語科のユニークな教育法として、昭和二十年代まで継承されることになる。

異色の教師・松田衛

一九三六（昭和十一）年の八杉の退官の後、主任教授（当時の呼称は主幹）となる松田衛は元来実業畑の人で、一

九〇三（明治三十六）年卒業後、三菱に入社するが、すでに述べたように日露戦争の勃発で志願して奏任通訳となり、ロシア語に加え現地で習得した中国語も操ったという。戦後はウラジオストックの東洋学院（極東大学の前身）の日本語講師となり、五年間教鞭をとった後、三井物産に入社、ハルビン支店に勤務した。一九一九（大正八）年松永信成教授が病気で倒れた時、滞露一七年の実績を買われ、鈴木於菟平に請われて母校に着任したのだった。彼の最大の業績は、独力で執筆し、自費出版した『松田和露大辞典』（東京堂、一九三三年）であろう。俗語や隠語まで多数収録した二二〇〇ページを超えるこの辞典は、その実践性でロシア語学習者に非常に役立ったはずである。松田は停年まで一〇か月を残して一九四二（昭和十七）年五月に退官している。その退官記念パーティーの席上での神西清の挨拶「迫ってくる人格の力」は、この教授の人柄を見事に言い当てている。「松田先生からはどうも語学を教わったというような感じがしません。これは勿論わたくしの不勉強がまずなによりもその原因なのですが、それにしても松田先生からは何かもっと別のもの、何かもっと人生に直接なもの、何かもっと人間の奥にあるもの、一口にいうと人格の力とでもいったものの方を、語学などよりもはっきりと植えつけられたような気がします」（『露西亜会会報』、第三一号、一九四二年）いかにも外語露語部の生んだすぐれた作家・翻訳家神西清の言葉らしい。この言葉通り、古武士のような風貌の松田は、豪放磊落で風流人でもあったらしい。一九五六（昭和三十一）年没。



松田　衛

除村吉太郎

除村吉太郎の功績

戦前の露語部の教官で、生徒に大きな感化力をもった人物がもう一人いる。一九四〇（昭和十五）年、その思想的傾向ゆえに、同僚、生徒たちに惜しまれながら教職追放（記録上は、依願退職）となった除村吉太郎（大正七年卒）である。一九二二（大正十一）年からハルビン日露協会学校の教師を務め、一九二四年に母校助教授となった除村は、一九三〇（昭和五）年に教授に昇任、一九三五年には文部省の在外研究員として、二年間ロシアに留学する。露作文やゴーリキイ、チェーホフの作品を講読する一方、文科の授業ではフォークロア、詩論、文学史などを教えた。モスクワ滞在中の一九三六年に橘書店から出版された『露文解釈から和文露訳へ』は、一九四七年に増訂版が白水社から、さらに一九六七年に改訂新版が同社から出ている。露文の多くを著名な作家や評論家の文章から抜粋し、これを二〇〇余の公式に分類して周到精細な解説を付し、それに対応の作文問題を添えたもので、今も版を重ねる名著となっている。

外語追放後は、評論活動を行いながら『ロシヤ年代記』を本邦初訳している。戦後は、新日本文学会、ソヴェト研究者協会の中心メンバーとして活動する一方、日ソ学院院長として生涯をロシア語教育に捧げた。『露西亜年代記』、『ベリンスキー文学評論集』全二冊（岩波文庫、一九五七年）などの先駆的翻訳の他、『文学とインテリゲンチヤ』などの著作多数。一九七五（昭和五十）年七十八歳で没。

除村の教職追放はこの時代の思想統制を象徴する事件だが、共産主義国となったソ連の言語を専攻する露語部の学生の動向は、官憲によって監視されていた。そのことを察知していたであろう八杉貞利は、弾圧が学内に及ぶことを危ぶみ、学生たちに言動を慎むよう注意を喚起していた。しかしその八杉もソ連の文化的運動には無関心だったわけではなく、その証拠に昭和初年の講読のテキストに、プロレタリア文学の代表作であるグラトコフの『セメント』や十九世紀の革命思想家ゲルツェンの著作を取り上げていた。またソ連の国内情勢については、後述するように露西亜会の講演を通じて、ソ連に滞在した特派員や外交官によって最新情報がもたらされていた。

左翼思想の浸透

そうした雰囲気のなかで思想的に左傾化する学生も多く出、ロシア語の学習だけでは満足せぬ彼らは、自主的な研究会を持つようになっていった。そうした動きの一つが、外語社研の活動である。この外語社研（正式名称東京外国語学校社会問題研究会）に関する「外語社研の思い出」という手記が、『ロシヤ会々報』第二六号（一九八〇年）に掲載されているので、少し紹介しておこう。

社研の母体となったのは、一九二一（大正十）年露語部文科入学の森正蔵、吉見春雄、神沢虎夫、能勢寅造らによる読書会だった。前述の蔵原惟人らによる第三次『露西亜文学』が創刊されたのもこの年である。河上肇の『社会問題研究』や山川均の『社会主義研究』といった社会思想関係の雑誌を下宿で輪読することからはじまったという。

ちょうどこの頃、ロシア飢饉救済運動が盛んになり、学内でも募金運動が進められ、二一年秋の語劇大会ではゴーリキーの『どん底』が演じられ、「ロシア飢饉救済」の名目で再度有楽座で公演し、その収益金をソ連大使館に寄付したという。そしてこの救援活動には露西亜会も関与していたというから、露語部全体が、新生ソ連の行く末を案じ

ていたと言えるだろう。

こうした背景の中で、先の読書会は堺利彦のM・L（マルクス・レーニン）会という学外団体とも関係を持ちはじめ、学内では他の語部の学生も加え、一九二二年秋に、一一名の会員で外語社研が発足するのである。そして一九二二年十一月七日（ロシア革命五周年記念日）に創立された《学生聯合会》に外語社研の名で加盟することになる。吉見自身は第四回メーデーで検束され、一九二三年六月に授業料未納と出席不良の理由で退学を長屋校長から言い渡されるが、外語社研は一九三〇年前後まで存続し、そこには未来社前社長西谷能雄（昭和十年退学）や一橋大学教授として多くのロシア文学、思想史研究者を育てた金子幸彦（昭和九年卒）らが名を連ねるのである。

外語のストライキ

西谷の名が出たので、彼が中心メンバーとなって一九三二（昭和七）年六月に起こった外語のストライキ事件に触れておこう。治安維持法によって左翼運動が過酷な弾圧を受けていたこの時期に、全学ストライキを決行するとは暴挙とも言えようが、そこに筆者は明治以来の外語露語部の反権力的精神の伝統を見る。ストの直接のキッカケは学生食堂の値上げ問題だった。ウドンが四銭から五銭に、ライスカレーが八銭から十銭に値上げされるとの貼紙が集会場に掲示されたことに端を発し、当時生徒課長として学生の思想調査に当っていた小林清貞教授の排斥運動へと発展、六月十七日に全学ストライキに突入したのだった。

ストは実質的には二週間（?）ぐらいつづいたように思う。……実質二週間のストの間、その継続のために、たえず学生大会が開かれ、アジ演説が行なわれ、「インターナショナル」が鳴らされた。生徒課までの長い廊下に各語部毎に、机、椅子が教室から持ち出されてうず高くバリケードがつくられた。もっとも戦闘的だったのはロシア語、ドイツ語、英語、フラ

ンス語、支那語部で、他の語部は傍観者的であった……。

（西谷能雄「外語ストの思い出」、『ロシヤ会々報』、第二五号、一九七九年）

一九六〇年代末の全共闘運動を彷彿とさせる光景だが、こんなことが特高に脅える一九三二年に外語で実際に起こっていたのである。スト参加者は続々と逮捕され、学内には放校処分の学生の名前が掲示されはじめる。結局このストで露語部の二年生は一一名の放校、退学者を出す。西谷もその一人であった。そして、この一九三二年のストライキを境に、露語部の自由な雰囲気は、外部からの監視と圧力に晒されるようになる。

小出民声の業績

ここで今ではほとんど忘れられている外語露語部が生んだ気鋭のマルクス主義歴史家小出民声、筆名早川二郎のことに触れておこう。一九二五（大正十四）年、露語部文科に入学、同級生に神西清がいた。卒業後古本屋を営みながら、ブハーリンの『共産主義のＡＢＣ』、リャザノフ評注、マルクス、エンゲルス『共産党宣言』、レーニン『国家と革命』などを翻訳、伏せ字だらけの彼の訳本は当時の青年にはかり知れない影響を与えた。

その後雑誌『無産者教育』、『労働者教育』の編集同人を経て、三木清、戸坂潤らの主宰する唯物論研究会に加わる。この頃から歴史に強い関心を寄せ、ボチャロフ、ヨアシニ共著『世界史教程』全五冊を完訳した他、コンラッド『日本歴史』、マヂャール『支那の農業経済』、サファロフ『支那社会史』の啓蒙的歴史書も紹介した。

しかし何よりも彼が情熱を傾けたのは古代史研究であり、そのために「古代二郎」とあだ名されたという。マルクスのアジア的生産様式論に依拠しつつ、彼はそれを日本古代史に適用し、『大化改新の研究』、『日本歴史と〝アジア

的生産様式〟など夥しい数の著作を残して、三十一歳の若さで一九三七（昭和十二）年奥秩父にて遭難死している。この時代にアジア的生産様式に着目した小出（早川）の歴史家としての先駆性は、再評価されるべきであろう。ちなみに長女小出真理は、詩人となり、ロシアの詩人マンデリシュタムの翻訳がある。

こうして露語部は、ほぼ同時期にマルクス主義の文芸理論家蔵原惟人と歴史家早川二郎、また作家、翻訳家として今なお高い評価を受けている神西清を輩出していたわけである。このような人材と、ともすると、過激な言動に走り易い学生を擁する露語部は、他の語部以上に特高のマークが厳しかったことは十分想像できる。

八　露語部の教育における「露西亜会」の役割

教育の一環としての露西亜会

「東京外語露西亜会」は鈴木於菟平教授在任中、一九二一（大正十）年前後にはすでに存在しており、会報も二回出たことがわかっているが、その会報も、また会の組織についての資料も残っていない。ただ、その組織は「種々の事情の為校の内外を打て一団とする意味に於て欠如たるものがあつた」という（『会報』第三号「本会新会則制定の経過」参照）。

鈴木教授が一九二三（大正十二）年夏ハルビンで客死して後、在校生も会員に加えて会の活動をより積極化しようという要望が高まり、一九二五（大正十四）年五月の集会で新しい会則が制定され、次いで翌二六年五月三十日の総会で八杉貞利教授が会長に推され、幹事七名（教官一、卒業生三、在校生三）が会長から指名された。

その年の七月に出た最初の会報は、鈴木教授時代に会報が二回出たことを考慮して「第三号」とされた。八杉会長

は「希望」と題する巻頭言において、北にハルビンの日露協会学校、西に大阪外国語学校が新設された現在、これらの競争者と相闘って勝利者となり、本邦対露関係の指導者たるべき使命を全うし得るため、在校生は最も緊張せる気分をもって学業の習得に努力し、校外の先輩は良く後進を誘掖指導し、校の内外が結束を固くし、一団となって活動するよう切望している。

（注　日露協会学校は一九二〇（大正九）年、大阪外国語学校は一九二一年創設。前者は一九三二年哈爾賓学院と改称）

新しい会則は、会員を「露語部現旧教員、本科卒業者、選科修了者、並に在学生」とし、専修科の修了者並に在学者、本科・選科・専修科の中途退学者も会長の承認を経て入会し得るものとしている。

会の目的は「会員相互の助力、親睦を図り、露西亜に関する各種事項を研究する」ことと定められ、この目的の達成のため諸種の会合の開催と会報の発行が規定された。

これに従って総会と例会が毎年それぞれ一回（五月と十二月）開かれ、各種の分野で活躍する卒業生、時には部外の専門家、あるいは駐日ソ連大使館員、訪日中のソ連の作家、語学者によるソ連事情についての講演が行われ、会員は当時の刊行物や放送からは得ることのできない清新な知識を得ることができた。また在校生だけが先輩を招いて話を聞く「小会」も随時ひらかれた。

会報は毎年二回発行された。会報には総会及び例会における講演が原稿のまま、あるいは要旨の形で収載された。また会員から寄せられたソ連事情やロシア史、ロシア語に関する研究、ソ連視察旅行記、内外各地の支部便りも随時掲載された。『会報』第六号の「学校近況」には、一九二七（昭和二）年から四年制に移行した後の露語部の文・法・貿易・拓殖各科別の授業課目と時間配当が詳しく紹介されている。

生徒委員による語劇大会の報告やクラス便りも楽しい。語劇については、上演された劇の梗概と配役が紹介され、

トドロヴィチの懇切な指導に対する感謝の言葉が添えられている。特に卒業生の回想記には、外語創立当初からの教師の風貌、その授業ぶりや授業内容が生き生きと語られていて、これまた露語部の歴史の貴重な資料となっている。

一九二五（大正十四）年一月二十日、日ソ基本条約が北京で調印され、二月二十七日に公布されて日ソ国交が回復した。露西亜会では五月二十三日、学生が主体となって着任早々のコップ・ソ連大使を招いて歓迎会をひらいた。歓迎会には大使のほか、浦潮極東学院の日本語教授で外語露語部とも由縁深いスパルヴィン博士ら大使館側三名、それにロイター通信社のスレパック特派員が出席した。八杉教授の歓迎の辞、大使の挨拶の後歓談に移り、スパルヴィン、松田衛教授らの挨拶があり、最後に在校生数名がロシア語のスピーチや文学作品の朗唱を行った。歓迎会は大成功であった。それ以後、ソ連側の客を招いて交歓することは露西亜会の恒例行事となった（『会報』第三号による）。

翌一九二六（大正十五）年十一月二十七日は八杉会長の表現によれば、「我露西亜会のため記念すべき日の一」であった。この日、ソ連邦代理大使ベセドフスキーはじめ、大使館、商務館員及びその家族四〇余名が露西亜会の集まりに参加したのである。八杉会長は「外国使臣の主なる人々が、しかもかくの如く多数相携へて、渺たる一学校の、主として学生の集会に参列したということは恐らく母校創立以来初めての事で、他語部にも前例の無いことである」とその喜びを表現し、当日の学生のスピーチ及び語劇のプログラム作成及びその実現に努力したトドロヴィチはじめ露語部諸教官に感謝している。上演された劇はメレシコフスキーの史劇『皇太子アレクセイ』で、二週間ほど前の語劇大会で演じたものの再演であった（以上『会報』第四号による）。

翌一九二七（昭和二）年十一月二十六日にひらかれた第二回の催しにはマイスキー代理大使以下、館員及びその家族や留学生等約四〇名が参加した。学生のスピーチ、短編小説（ラスカース）や詩の暗誦は学年別に行われ、一年生三名、二年生七名、三年生四名が出演した。劇はゴーリキーの『町人』であった（『会報』第五号による）。

第三回目の大会は一九二八（昭和三）年十二月八日で、ソ連側からはトロヤノフスキー大使以下三〇余名の客を迎えた。上演された劇はトルストイの『一切の禍根』。その後の学生のスピーチと朗誦には一年生から三年生まで一一名が出演した（『会報』第七号による）。

第四回大会は一九二九（昭和四）年十二月七日、ソ連側の客は相変らず三〇余名で盛会であった。学年延長のため翌年卒業すべきクラスがなかったため語劇はなく、スピーチと朗読に生徒一八名が出演した。

迫りくる思想統制

しかし翌一九三〇（昭和五）年にはこの大会は「諸種の事情によって」開かれなかった。

当時大学や専門学校に対する文部省の思想的規制は次第に強まり、一九二八（昭和三）年一月には専門学校令が改正され、「人格の陶冶及び国体観念の養成」が目的に加えられ、同年十月には思想問題に対処するため大学及び高等専門学校に学生（生徒）主事が置かれた。ソ連の客を迎えての露西亜会の行事の中絶もこのような事情と無関係ではなかったと考えられる。

『会報』第一〇号（一九三〇年七月発行）巻頭に載った八杉教授の新入生に与える告示とも言うべき「露語部の使命に就て」は、当時の厳しい情勢下におけるロシア語学習の態度について生徒の注意を促したものである。八杉教授は、ロシア語の学習研究にはソ連国情の研究は必要不可欠であるが、ソ連が共産主義を建国の基盤としているからと言って、その理論の研究に没頭するようなことがあれば、それは露語部本来の使命とは関係ないものであるのみならず、周囲の同僚に多大の迷惑を及ぼすような結果を招く恐れがあること、ロシア語と言えば共産主義を連想する人の多いわが国の現状では、露語部にあってロシア語とソ連事情の研究に従事する者は一言一行にも慎重でなければなら

ぬこと、その半面、外語の目的がたとえ「外国語に熟達し、実務に適する者の養成」であっても、外国語及び外国事情の研究には学習者の能動的努力が必要であり、学習の態度は飽くまでも学究的であるべきこと、皮相な知識の獲得に満足する軽薄な学習態度では競争激甚な社会で勝利は得られないことを切々と説いている（『会報』第一〇号参照）。

満州国の建国（一九三二（昭和七）年）など内外諸情勢の変化は、在校生の指導誘掖という露西亜会の活動の更なる積極化を要求した。一九三九（昭和十四）年三月、満州国の主要都市を歴訪した八杉会長はすでに外語を停年退官していたが、南満州鉄道株式会社が社員のほとんど全部に対し、種々の方策を講じてロシア語の習得を奨励しつつある実情を見、また日露協会学校の後身たるハルビン学院が満州国の国立大学に昇格して年限を延長し、毎年官費生四〇名を含む百名という多数の学生を採用し、関東軍の指導のもとに豊富な経費をもって万般の設備を整えつつあること知り、大きな衝撃を受けた。

露西亜会による課外講座

八杉会長は、「東京外語露語部卒業生の語学力についてはさしたる悪評を耳にしないが、隣邦事情に対する知識の欠如はかねてから指摘されていたところであり、この欠陥を是正することが強大な競争者に伍して落伍者とならないために必要である」との認識に立ち、しかも学校当局の力や露語部教員の努力に頼ることが不可能である以上、今こそ露西亜会がその本来の目的に従い、母校の進展に寄与すべき時であると力説した（『会報』第二八号、一九三九年六月十七日総会記事参照）。

総会の決議により、会則第二条は「本会は会員相互の助力、親睦を図り、母校露語部の進展に寄与し、露西亜に関

する各種事項を研究するを以て目的とす」と改められ、更に会の事業として「課外講演の開催」という一項が加えられた。会の機構も、会長自らの発意によって、会長の個人的指導体制を改め、会長、幹事を廃し、教員及び卒業生から選ばれる二〇名以内の理事より成る理事会の合議によって会を運営することとなり、八杉会長が理事長に推された。在校生からは、常務理事の業務遂行を助けるための委員六名が選ばれた。

課外講座実施のためには新たに講座委員会が設けられ、それぞれの分野の専門家たる卒業生を招いて、一九三九（昭和十四）年は十月から十一月まで五回、翌四〇年は四月から六月まで一〇回の講義が行われた。講義の内容はソ連の国家機構、ソ連共産党、ソ連の外交、軍事、経済、民族問題、ソ連をめぐる国際政局等、広汎な領域にわたるものであった。課外講座に要する資金充実のためには会員有志から寄付金を募集し、五〇余名の応募者から九〇〇円近い資金が寄せられた。

しかし一九四〇（昭和十五）年末、露語部及び露西亜会にとって大きな不幸が訪れた。すでに述べたように除村吉太郎教授がその思想的立場を理由に十一月三十日付で強制退職させられるのである。また「教育界の新情勢はわが露西亜会をして改組を余儀なからしめ、その会員中より在校生を分離し、卒業生のみを以て会員とするに至った」のであった（『会報』第三一号参照）。これに伴って一九四〇年十一月九日の総会で会則は大幅に改正され、「母校露語部の進展に寄与し」の文言は削除され、課外講演は中止となり、会の役員も幹事を一二名とし、その互選によって幹事長が置かれることになった。幹事長には八杉理事長が選ばれた。従来年二回発行されて来た会報も中止となり、同年七月発行の第三〇号をもって最終号とするに決した。

しかし、それから二年を経て、せめて会の存在を明らかにするためにも、会報はやはり少なくとも年に一回は発行する必要があるとの声が高まり、一九四二（昭和十七）年十二月、第三一号が「松田先生記念号」として発行された。

松田衛教授は同年五月三十日、還暦を機に、翌年三月末の停年を待たずに退官し、その功労感謝会は十一月十七日に開かれたのであった。

思えば、東京外語露西亜会がその結成の当初から、一九四〇（昭和十五）年末、在校生を会員から排除するまでの一五年間、母校露語部の教育の充実、在校生の指導、露語部の進展に寄与した大きな功績は露語部の歴史を語る上で無視することのできないものであり、その活動の記録である会報は貴重な歴史的資料である。

会報は四六版の冊子で、初号が一九二六（大正十五）年七月に第三号として出され、翌年から一九三九（昭和十四）年まで一三年間は毎年二冊、一九四〇年に一冊、そして二か年の中断の後、一九四二年十二月に最後の第三一号が出た。通計二九冊、その総ページは一、四四三ページである。

会報には毎年一回、現旧教員、卒業生及び在校生の名簿が付けられており（その総ページ数は会報総ページ数の三五パーセント）、会員の住所、その職業、または勤務先及び地位の異動を年毎に明確にたどることができる。

（注　この会報は一冊の欠本もなく八杉会長が大切に保存し、一九四五［昭和二十］年五月の大空襲で麻布の自宅が焼失した際も、幸い疎開していて焼失を免れ、戦後会長から外語へ寄贈されたものである。
尚、終戦後逸早く再発足した「東京外語ロシヤ会」が一九四八年十二月に発行した会員名簿の冒頭の「再発足までの経過」の記述によれば、一九四四年の春に会報第三二号が発行されたことになっているが、現在その会報は見つかっていない。）

会報には毎号巻頭に八杉会長の会務報告、会の活動についての希望あるいは所見、新入生に対するロシア語学習についての説示などが載っており、それによって露西亜会に寄せる会長の熱い思いを窺い知ることができる。

会報にはまた例会及び総会で行われたソ連邦事情についての講演や報告の要旨、会員あるいは部外の専門家から寄せられた研究論文、旅行記や回想記など、実に六〇余篇が収録されている。

例えば山内恭治（明治四十一年卒、三菱商事）は「赤露に於ける社会制度の一端をのぞきて」（『会報』第三号）で、

一〇か月のロシア滞在中に見学した託児所、小学校、病院、刑務所について極めて好意的な印象を語っている。

除村吉太郎（大正七年卒）の「シチェプキンとロシヤ劇場のリアリズム」（『会報』第三号）、磯村英一（大正十二年卒、のちに東洋大学学長）の「労働者教育運動の発達」（『会報』第三号）、蔵原惟人（大正十二年卒）の「ソウェート連邦の経済復興と電化事業」（『会報』第四号）はいずれも寄稿論文である。訪日していた文学者シヴィリョフは講演「ソウェート・ロシヤに於ける文学」（『会報』第五号）で、一九二〇年代の後期、党の抑圧のもとで尚活発な創作活動を続けるゾシチェンコ、ブルガーコフ、ピリニャークらの作品について詳しく語った。レニングラード大学東方言語研究所の教授コンラドは「最近露西亜語の変化」について語り（『会報』第五号）、革命後の変化の特徴としてプロレタリア化（卑俗化）、ヴァーヴァリズム（外来語の多用）、アメリカ化（略語化）の三点を挙げ、それがロシア語の美しさを破壊していることを嘆いている。

米川正夫（明治四十五年卒）は「ソヴェートの演劇と文学」（『会報』第六号）で訪ソの印象を語り、二つの対照的な劇場、メイエルホリド劇場と芸術座の新旧二つの傾向について述べている。

通商代表部法律顧問ベックマンの「ソヴェート連邦の経済的並に文化的建設事業に於ける五年計画」（『会報』第八号）は工業、交通、貿易、教育、異民族の文字改革、文学等、百般にわたる二時間を超える長い講演であった。

『会報』第一四号には一九三二（昭和七）年五月の総会における米川正夫のソ連作家「ピリニャークの文学について」の講演、ソヴェート文学についての参会者の多様な質問に対するピリニャークの応答、部外から特に招かれた大竹博吉の「ソヴェート・ロシヤの現状」が載っている。

駐在武官として三年間ソ連に在勤した前田稔（大正十年選科修了、当時海軍大佐、のち中将）の「ソ連邦在勤中の見聞」（『会報』第一九号）は五カ年計画による重工業の目覚ましい発展や軍備の拡充、その半面依然として改善され

ない食糧難、物資難、住宅難について、自らの見聞にもとづいて詳しく報じている。

二九冊の会報に載った六〇余点にのぼるこれらの講演や報告の資料は、ソ連邦及び日ソ関係の歴史研究の上で今もなおその価値を失っていない。

戦後のロシヤ会

東京外語露西亜会は戦後一九四七（昭和二十二）年五月にはじめての総会をひらき、会則を改正して再び在校生を会員に加えることとし、「露西亜」の文字を廃し、「東京外語ロシヤ会」として新発足し、四八年十二月には戦後最初の会員名簿を発行した。

当時占領軍ＣＩＥ顧問イールズの「赤色教授追放」キャンペーンは凄まじいものがあり、これに対し学生は全国的に激しい抵抗運動を展開していた。このような状況のもとでロシヤ会が一部幹事の専行により、一九五一（昭和二十六）年十二月の総会に講演者として殊更に反共理論家鍋山貞親を招いたため、総会は学生によって完全にボイコットされた。これが原因となって、一九五三年十一月の総会で会員から学生を排除することが強引に決議され、八杉会長をして「曾って本会が校の内外を打って一団とし、卒業者各位の助力によって在校後進者の誘掖指導に努めました時を思いますれば多少の感慨無きを得ぬわけではありますが……本会も創立来五十年……地上何物にも無限の生命を望むことは出来ませぬが……、」（『ロシヤ会会報』第二号、一九五四年）と概嘆させた。誠に露西亜会は八杉会長が全生涯を捧げて慈しみ育て、愛し、守って来た会であった。

戦後の会報は一九五一（昭和二十六）年の第一号から一九八三（昭和五十八）年の第二九号まで、もっぱら露語部教官の手によって発行された。会報はタブロイド版で、量的には旧露西亜会会報には及ぶべくもないが、編集者はつ

ねに、内容において戦前の会報に劣らず、貴重な歴史的資料たらしめることを念願し、また学内露語部の情況やその行事あるいは毎年の語劇について詳細に報じ、卒業生と在校生との結びつきの保持強化に努めた。

第三次の「東京外語ロシヤ会」が再び在学生を会員に加えて新しく発足したのは一九九七（平成九）年十一月二十二日の総会においてである。

戦時下の露語部

話を元に戻し、前章では大正から昭和初年の外語露語部の自由な雰囲気について述べてきたが、満州事変にはじまる戦後体制下の露語部の状態はどうだったか。　これについては一九四〇（昭和十五）年から二年間の中断を経て出された『露西亜会々報』第三一号（これは還暦を機に外語を退官した松田衛記念号となっており、戦前に出された最後の会報である）で、主任教授となった佐藤勇の「母校の近状」が、詳しく伝えている。

「この数年間に、校舎こそ旧態依然たる震災後のバラックながら、内容的に面目を一新した観があります。過去の自由主義個人主義的であった時代から、師弟相携えて倶学倶進の報告団精神の昂揚へと一大飛躍を遂げつつあります」と前置きして、その具体例として集団勤労作業のため、体力のない教官が停年前に辞職していっていること、教員も学校報国隊の一員として、教練査察が義務づけられ、大隊長、中隊長の資格で学生の列に加わり、軍人式の挙手の礼をしていること、また軍事教練の強化の結果、生徒の礼儀作法が十年前のマルクス主義流行時代より格段に良くなったことがあげられている。

また一九四一（昭和十六）年からはじまった卒業短縮（この年は十二月卒業）により、四二年には半年短縮して九月卒業となるが、学力の低下のないよう夏期休暇（夏期体練期と改名）を返上して、授業が行われた。なおこれは今

からすると笑い話に思われようが、この年の統計で外語生徒の平均体位が国立学校中ビリから二番目だったことが判明、学校当局は四五分授業に切り換え、十二時半までに五時限分の授業とし、午後は体力錬成に当てることになったという。

また入学志願者は、時局を反映して英語部の志願者が減少の傾向をたどり、逆に支那語と露西亜語は需要が増加したため、従来の二倍を採用、文・法・拓の三科の混合組と貿易科だけの単一組の二科に分けて授業が行われるようになる。

そしてこの一九四一、四二年は、露語部にとって、教授陣の大幅な交替が行われた年でもある。なんと二年間で、露語部は六名の新任教官を採用するのである。つぎにその名を列挙する。

アレクサンドル・パブロウィチ・ミチューリン（トムスク大学法科卒）がトドロヴィチの後任として一九四〇年就任し、木村彰一（東大文科昭和十二年卒）が一九四一年十月教授任命。すぐれた言語学者でもあった木村は、四七年北海道大学に移籍、ロシア文学科を設置し、スラブ研究センターの前身であるスラブ研究施設の創設に参加、その後東京大学に移り、そこにも露文科を設置した。一九五三年には『ロシア文法』（八杉貞利と共著、岩波書店）、一九八五年には『古代教会スラヴ語入門』（白水社）を出している。一九八六年、ラテン語の辞書編纂作業中に倒れ、不帰の人となった。石山正三（昭和十五年卒）は四一年陸軍航空士官学校士教官より母校助教授に就任し、ベ・ア・ストルジェシェフスキー（ハルビン法政大学東亜経済科卒）が一九四一年十一月就任、山本二郎（昭和九年卒）が四二年四月陸軍幼年学校より母校教授に就任。山本はその後久保二郎と改姓。四七年より神戸市外国語大学に転任した。さらに野島義一（昭和十二年卒）が四二年五月東亜研究所より母校助教授就任、東亜研究所嘱託を兼務している。

ストルジェシェフスキーは東亜研究所でラジオ傍受をしていたポーランド人で、学生増募に伴って雇い入れられた。

またミチューリンは米秋林と漢字の当て字を使い、国籍欄には元露国人と便覧には記載されている。なお、ミチューリンは戦後一九四六年いち早くソ連国籍を取得した。

そしてこの戦前の露西亜会会報最終号には、会の活動が許されぬ情勢にあり、例会もなく、在校生のために催した「ソ連事情講演会」も中止のやむなきに至ったという八杉貞利の苦渋に満ちたあとがきが付されている。

九　東京外事専門学校から東京外国語大学へ

一九四四（昭和十九）年に東京外事専門学校と校名が変更され、修業年限も三年に短縮され、本科は第一部（支那科、蒙古科、タイ科、マライ科、インド科、ビルマ科、フィリピン科、イスパニア科、ポルトガル科）と第二部（ドイツ科、フランス科、ロシヤ科、イタリヤ科、英米科）に分かれており、学則第一条には「本校ハ専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及（中略）其ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トス」と「八紘一宇」の精神が高らかにうたわれていた。

一九四三年からは勤労動員などで三年時の授業は行われなかったが、これも学則第六条「授業ハ教授及修練トス。修練ニ付テハ別ニ之ヲ定ム」と明記されていたのだから、当時の状況からすればやむを得ぬ事態だったのだろう。

この当時学生生活を送った原卓也（昭和二十六年卒）によると、西ヶ原に新築した校舎は一九四五年五月に焼失、上野の東京美術学校や図書館講習所、美術研究所などに分散して授業をし、四六年九月から上石神井の東京電波兵器技術専修学校跡の木造棟と、智山中学の一部を借用して授業が再開された。木造棟はおそるべき代物で、窓にはガラスでなく障子紙が貼ってあり、狭い中庭をへだてた向いの棟には引揚げ者の家族のおむつや洗濯物がひるがえってい

たという。暖房などないので、窓から障子紙を引きはがしてバケツで燃してしまったので、吹きさらしの風が肌に刺さり、近くのドイツ語やフランス語がそのまま聞えるといった状態だった。

それでも外事専門学校の卒業生のなかには、国費留学生としてモスクワ大学に留学し、ロシア史を専攻、帰国後東京大学教授となり、日本ロシア文学会々長を務めた米川哲夫（米川正夫の長男）、ロシア文学の相馬守胤（日本では数少ないサルトゥイコフ＝シチェドリン研究者、札幌大学教授）やソルジェニーツィンの翻訳者として知られ、ロシア美術にも造詣の深かった木村浩（故人）、新聞社モスクワ特派員の草分け的存在ともいえる臼田昭三郎（共同通信社）、谷畑良三（毎日新聞）等がいる。

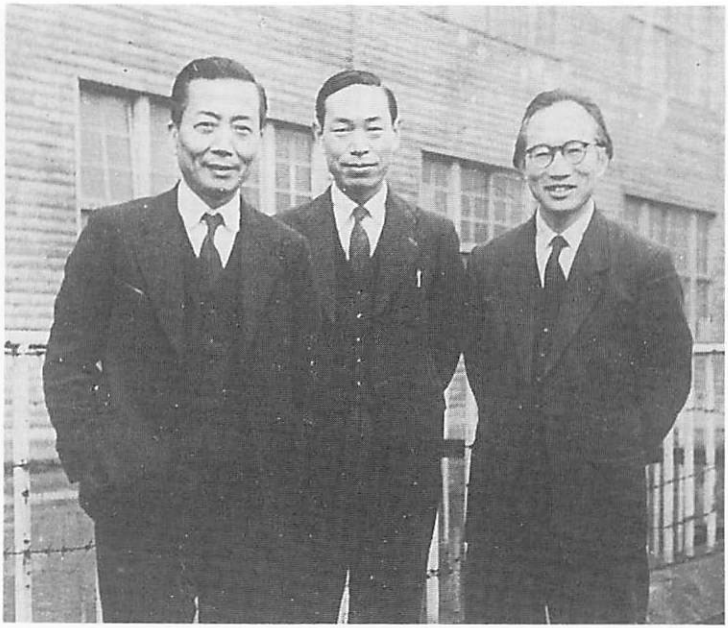
前学長原卓也は外事専門学校最後の卒業生であり、希望者一四名が新制大学三年次に編入することが認められ、形だけの入学試験で全員が合格したという。

新制東京外国語大学の発足当時は一二語科制だったが、一九五一（昭和二十六）年から第一部（英米）、第二部（フランス、イタリヤ）……の全七部制に改編され、ロシヤは第四部になった。

学科名の変遷を列挙しておく。ロシヤ学科（一九四五－五〇）、第四部（五一－六〇）、ロシヤ科（六一－六三）、ロシヤ語学科（六四－九〇）とめまぐるしく移り変り、一九九一年からはポーランド・チェコの両語科を加えロシヤ・東欧語学科が発足するが、九五年には、学部改編によってロシア・東欧課程として位置づけられることになった。

大学発足当時のロシヤ科教員スタッフ

大学発足当時の専任教官スタッフは、教授・佐藤勇（一九六四年退官、以下西暦は退官年を示す。八九年没）、助教授・東郷正延（一九五七年から教授。七一年）、和久利誓一（一九六一年から教授。七四年）、講師・石山正三（一



戦後のロシア語学科のスタッフ。左から、佐藤勇、和久利誓一、東郷正延

九六二年から教授。七三年没）、外国人教師アレクサンドル・ミチューリン（五七年没）、外国人講師ボリス・ストルジェシェフスキー（五四年没）であった。そしてこの佐藤、東郷、和久利、石山体制は一九六四（昭和四十）年の佐藤の停年退官までつづく。つまりほぼ二〇年間、ロシヤ科の専任スタッフは不動のままであったわけだ。

教科書としては、一年次の文法の入門書として八杉貞利の『ロシヤ語階梯』が用いられ、石山正三が担当し、それ以外にニーナ・ポターポヴァの『RUSSIAN』という英語版のテキストが長い間使われ、残りの専任教員が順番に教えたようだ。

また、語学、文学、事情という区別はすでにあったが、必らずしも厳密に守られていたわけではなく、少なくとも学生の側からすると全員がロシア語の先生という印象が強かった。ロシア地理などを講義していた佐藤が事情で、石山、東郷が語学、和久利が文学という区分だったと思われる。

石山正三

外語に現存する戦後で最も古い一九五一（昭和二十六）年の講義題目によると、専門科目としてロシア語史（米秋林、佐藤）、ロシア文学史（和久利誓一）、作家論（トルストイ）（石山正三）、ソヴェト社会概説（佐藤）、ロシア語講読（東郷）、時事作文（佐藤）の諸科目が立てられている。また二年後の一九五三年には、ミチューリンによる日露関係史の講義が加わっているのが注目に値する。

一九五四年にストルジェシェフスキーが退職、五六年にミチューリンが死去すると、その後は外国人のポストがどうしてか召しあげられてしまったため、ネイティブ・スピーカーによる教育は、非常勤のワルワーラ・ブブノワ（五七年から翌年ソ連帰国まで）、タチヤナ・オブル・野村（五八―七〇）、タマーラ・原（七一―）に頼る状態が二〇年以上も続いた。したがってこの時期に学んだ学生（筆者も含めて）は、卒業時の会話能力という点では、その前後の時期の学生よりも劣っていたにちがいない。また発音もお世辞にも良かったとはいえないだろう。にもかかわらず、卒業生の多くが、ジャーナリストや商社マン、外交官としてモスクワを中心とするソ連各地で活躍できたのは、大学を出てからの苦労の賜としか思えない。

筆者自身の記憶でも、一年次にはタチヤナの四〇名単位での会話（といっても民話の暗唱）があったが、二年次にはまったく外国人の授業がなかったため、三年次用に非常勤として会話を担当した橋本（岩田）みさご（ソ連育ちでモスクワ大学日本語科卒業）は、学生の発音を聞いて激怒し、戦前のトドロヴィチのように、一人ひとり徹底して発

音矯正に努めたものだった。

そして六六年にロシヤ語科は、定員四〇名が六〇名となり二クラス制に移行、定員増に伴い助教授として新任するのが原卓也である。また佐藤勇の後任として助手のポストにあった城田俊（昭和三十四年卒。モスクワ大学大学院修了）が北海道大学助教授に転任したため、チェコ留学中の磯谷孝（昭和三十八年卒）が助手に採用された。なおこの年には経済学の岡田進（昭和三十五年卒）が講師になり、ロシア科の事情講義も担当することになったため、事情の非常勤講師としてソ連経済を講じた宇高基輔（東大教授）が解嘱となった。なお事情の非常勤講師としては竹浪祥三郎、和田敏雄（昭和二年卒）、元毎日新聞の渡辺三樹男、ついでロシア史の菊地昌典（東大助教授）が教鞭をとっている。また前述の橋本みさご講師の担当時間は、前年の二時間から八時間に激増している。

ところで一九五七（昭和三十二）年にソ連が人工衛星スプートニクの打上げに成功し、六一年にはついにガガーリンを乗せた有人宇宙船ヴォストークが打上げられたことは、世界中に衝撃を与え、東大など理科系の学生にロシア語の履修を義務づけるところまで出て、ロシア語熱は非常に高まり、この頃のロシア語科の入試倍率は一五倍を前後していた。またこの時期は六〇年安保の直後のことでもあり、巷では「カチューシャ」や「黒い瞳」といったロシア民謡が歌声喫茶で盛んに唄われたものだった。

こうしたなかで、二〇年近く続いた不動の教授陣が佐藤（一九六四年）、東郷（七一年）、和久利（七四年）の退官と七三年十一月十四日の石山教授の不慮の死（後述）によって大きく変わっていく。佐藤は八一年に念願の『和露辞典』（講談社）を、東郷は日ソ学院長の激務の中、故石山、染谷茂（昭和七年卒、上智大学名誉教授）、磯谷孝らの助力を得ておそらく世界最高の収録語数と豊富な文例、類似語の懇切な説明を盛りこんだ『研究社露和辞典』（八八年）を、和久利は長らく改訂がなされなかった八杉貞利の『岩波露和辞典』を、新田實（昭和二十九年卒）、飯田規和

（昭和三十年卒）との共同編集で全面的に改訂し、収録語数も従来より大幅に増え、新語も収録した使い易い辞書として、ロシア語学習者に重宝がられている『岩波ロシア語辞典』（一九九二年）を出版した。和久利の『テーブル式ロシヤ語便覧』（一九六〇年初版）は、中級文法書として四〇年近く全国のロシア語学習者に愛用された。なお東郷、和久利ともに日本ロシア文学会の会長を務めている。

全共闘運動と石山正三の死

すでに通史編や、フランス語科の歴史のなかでも述べられているとおり、一九六〇年代末から七〇年代前半にかけては、本学で全共闘運動の嵐が吹き荒れた。そしてこの運動の中心メンバーには、ロシヤ語科の学生が少なからずいた。カニ工船に乗るため、大学を自主留年した結果、この運動に遭遇した筆者としては、その当時の雰囲気を記憶の中から甦らせなければなるまい。

あれは一九六八（昭和四十三）年九月も終り頃のことだ。およそ一年半ぶりに母校の正門を入った筆者は、「〇管規負担区分粉砕！」のバカでかいタテ看に度肝を抜かれた。筆者の知っていた外語の政治運動は、民青系の学生による歌声運動やビラ配り程度で、時折革マルを称する数名が、学内を悲愴な顔つきでデモするのを見かけるだけだった。それがどうだ！　わずか一年半大学を留守にしただけで、バリケード・ストライキを訴えるまでに政治意識（？）が高まっているとは。信じがたい気持で、ロシア語科の一年生が占拠しているという木造校舎二階の学長室へ行き扉を開いた。まっさきに目に飛びこんできたのは学長席にふんぞり返る白ヘルにタオルで覆面をした神経質そうな若者だった。自分の名を名乗り、事情説明を聞こうとする筆者に返ってきた言葉は「日和見！」だった。

曲りなりにもカニ工船で半年、その後一年父親の稼業の印刷業を手伝ってきた筆者には、この「日和見！」という

決めつけは許しがたかった。何か反論しようとした時である。壁際にたむろしていた一〇名近い女子学生が口をそろえて「日和見！」の合唱。これでは対話は成り立たないと考え、昔の友人を探すことにした。

といっても留年生を探すのは、そう容易ではなかった。彼らはほとんど大学に顔を出すことがなかったのだから。

そうこうするうちに授業を潰してのクラス討論、それがみる間にストライキ実行委員会へと発展していき、またたく間に全学ストライキに突入してしまったのである。当時伊東光晴教授と山之内靖助教授のゼミに参加し、初期マルクスの疎外論と社会主義経済における利潤論争の理論的整合性が可能かということを研究テーマにしていた筆者は、若い学生たちの過激さにはとてもついていけなかったが、彼らが提起している問題は、単なる寮問題の枠をはるかに越え、資本主義体制の根幹を揺がすものに映った。したがってバリケードの内か外か――と聞かれたら、内側にいたと答える。そして自分自身、人生に迷いながら、スローガンの持つ空ろさにも気づきつつ、まったくの部外者として傍観的態度を取ることはできなかった。

第一に驚いたことは、それまでまったくのノンポリだと思われた学生の間から、続々と見事なアジ演説をする学生が出てきたことだ。大学など来ることなく、寮で議論に習熟していた連中かも知れないが、その時受けた印象は、その後ロシア思想史研究の道に進んだ筆者には、バクーニンの「闘争の中でこそリーダーが生まれる」という理論の正しさを証するものとなった。

今思うと非人道的もはなはだしいあの二昼夜に及ぶ大衆団交。寒さがしんしんとつのる中、老教授たちにせめて毛布をという意見も「日和見！」の一言で一蹴されてしまうのだった。

第二に、議論の場では、つねに急進的な意見が力を持ってしまうということを思い知らされた。

その頃のロシヤ語科は、学生と教師が授業以外で付き合うことはほとんどなかったから、教授会で起こっているこ

となど、筆者は知る由もなかった。ただあの疾風怒濤のような事件がなかったなら、自分が今東京外大の教師をしていることもなかったとは思う。ハネ上り、無責任、独善的といろいろな全共闘に対する批判はあろうが、彼らの提起したほとんど解決不能な問題の解をもとめて一生苦闘している人間は想像以上に多いと確信している。

筆者がロシア思想史という学問分野に惹かれたのも、そうした雰囲気の中での自主的読書会からだった。大学側のロックアウトが長引くなか、五月に唯一残っていた単位を充足するべく卒業論文を執筆し、六九年六月三十日に卒業証書が送られてきたのだった。

そして卒業から五年経った七三年の十一月、石山正三学生部長の訃報に接した時の衝撃は今も忘れない。二度目の学生部長として学生との団交に明け暮れ、積み重なった疲労が原因であることは明らかだった。

決して嘘のつけない性格で、クラス雑誌のアンケートの「将来の希望」欄に堂々と「学長」と記すような人だった。野心家であったのは事実だが、虚栄心とは無縁な人だった。「すべてに対して一本筋の通った石山先生の気骨ある態度」と当時の在学生が記すとおりの人だった。まだ五十代半ばだったが、勤続三二年八か月と外語では最古参の教授だった。合掌。

十　紛争前後から現在まで

一九七四（昭和四十九）年の和久利晳一の停年退官に伴って原卓也が学科主任となり、札幌大、北大を経て、外語に着任した新田實（昭和二十九年卒）、磯谷孝、また石山、和久利の後任である飯田規和（昭和三十年卒）、志水速雄（昭和三十六年卒）が相次いで教授陣に加わり、スタッフは一新される。以来八九年に学長に就任するまで一五年近

く主任を務めた原は、ロシヤ語学科の刷新に努め、それまで形骸化された感のあった語学、文学、事情の三部門に、専門性の高い人材を配置し、語学のみの教育体制からの脱皮をはかった。

ソ連でペレストロイカのはじまる八五年までの教員の配置は語学＝磯谷孝、中澤英彦（七五年採用）、文学＝原卓也、飯田規和、事情＝新田實、志水速雄。磯谷は独創的な作文教程の編纂や体の研究から、文化記号論へと進み、その方法を駆使して多くの評論を著している。

また七五年東京外大大学院修了と同時に助手となった中澤は、動詞（運動の動詞と体）の研究ですぐれた業績をあげる一方、ＮＨＫラジオロシア語講座の講師として入門編を担当、ロシア語の面白さを学生や一般の学習者に植えつけた。

原卓也は二十三歳にしてショーロホフの大長編『静かなドン』（新潮社、一九五四年）を翻訳、その後もトルストイ、チェーホフなど原稿用紙一〇万枚以上の翻訳を成し遂げ、その訳文の美しさ、正確さでは右に出る者がない。またソ連における人権問題にも強い関心を持ち、ソルジェニーツィンやサハロフ擁護の講演会やキャンペーンを展開し、その中で学生の間にソ連・東欧研究会（略称セルグ）が結成され、そのメンバーから作家の島田雅彦や政治学者外池力（明治大学助教授）、ロシア文学者清水俊行（神戸市外大助教授）が出ている。また一九七〇年に「ロシア手帖」の会を結成し、講演会活動を通じてロシア文学の普及に努める一方、機関誌『ロシア手帖』は新聞雑誌に載ったロシア関係論文・記事の貴重なビブリオグラフィーとして注目され、七一年の創刊号から九五年の四〇号まで続いた。このビブリオグラフィー作成作業に自主的に参加した学生のなかから、桑野隆（昭和四十五年卒）東大教授、渡辺雅司（昭和四十四年卒）、亀山郁夫（昭和四十七年卒）本学教授、安岡治子（東大助教授）をはじめ、多くの研究者が輩出していることをつけ加えておく。

飯田は日ソ翻訳懇話会での活動を経て外語に赴任、タルコフスキーの映画で有名になったレムの『惑星ソラリス』をはじめ、チンギス・アイトマートフの小説の翻訳を数多く手がけ、その温厚な性格で女子学生に慕われた。

新田は、NHK国際局で培った日本人離れしたロシア語の運用能力を駆使して、テレビロシア語講座の初代講師を務め、『ロシア語手紙の書き方』（ナウカ社、一九七九年）を著す一方、ソビエト社会学にも造詣が深く、マスコミの言語を学生に伝授し、多くのジャーナリストを育てた。停年前に留学生日本語教育センター長となり、センター教員の身分改善など、抜本的な改革を行った功績は今も高く評価されている。

また一九八四年に急逝した志水速雄は、六〇年安保時代に全学連中央執行委員兼国際部長として勇名を馳せ、外語卒業後清水幾太郎の感化を受け、ソ連政治や日露関係を専門にし、『ペテルブルグの夢想家』（中央公論社、一九七二年）というドストエフスキー論をも著す多才ぶりを発揮した。主著『現代ソ連国家論』（中央公論社、一九七一年）のほか、『日本人はなぜソ連が嫌いか』（山手書房、一九七九年）という挑発的なタイトルの本を出し、話題となった。ともあれペレストロイカを待たずして世を去ったことが惜しまれる。

なお一九七七（昭和五十二）年に外国人教師のポストが復活し、学生たちに現地のいきいきした情報とホットなロシア語の知識が伝えられるようになった。その顔ぶれを列挙すると、ユーニエフ（一九七七）、バルーエワ（七八－七九）、チトーワ（八〇－八一）、スタルシーノワ（八二－八三）、ロマーノワ（八四）、マズルケーヴィチ（八五－八六）、ヴォロージナ（八七－八九）、アルトゥホーフ（九〇－九三）、チェルニャケーヴィチ（九四－九五）、ドゥガーノフ（九六、九七年一時帰国中に急逝）、シェフテレーヴィチ（九八）。九九年、目下ロシアで最も注目されている新進作家ソローキンが一年の契約で着任する。

ロシヤ語学科の学生は、従来からさまざまな分野の大学院に進み、研究者となる率が高かったが、原主任のもとで

教育の専門化が進み、加えて教員・学生間の壁が取り払われ、両者の親密度が増したこともあって、文学、語学、事情（歴史、経済、思想史等）の研究者をめざす学生が増え、その傾向はロシヤ語学科の伝統として今も受け継がれている。

八〇年代後半になると、ロシアのペレストロイカに呼応するように、ロシヤ語学科の編成も大幅に変っていく。志水速雄の後任として事情担当の渡辺雅司（ロシア思想史）が着任、一九八八年には臨時増募によって安岡治子（ロシア文学、九二年東京大学に移籍）、九〇年には前年に学長に就任した原卓也の後任としてロシア文学・芸術論の亀山郁夫が加わる。

さらに相次いで停年退官した飯田規和（九一年）、新田實（九三年）の後任として、ロシア史・民族問題が専門の高橋清治とロシア経済史の鈴木義一（ともに東京大学出身）が着任したほか、外国人任用法によって「古今集」の訳者として著名な日本文学研究者のアレクサンドル・ドーリン（九三年―）が採用されることになる。

十一　現状と人材

こうした専任教員の交替によって、ロシヤ語学科の年齢構成は若返り、原体制以来の学生との交流はさらに密度を増し、一九九五（平成七）年以降の新カリキュラムのもとでも、専攻のロシア関係で卒業論文を執筆する学生の数が非常に多く、どのゼミナールも活気に満ちていることは特筆に値しよう。また新スタッフの加入により、それ以前よりさらに専門化が進んだため、大学院進学率は本学一を誇っている。

一九九一年には、言語学の千野栄一教授の永年の努力が実を結んで、チェコ語とポーランド語が日本で最初の専攻

語として新設され、ロシヤ語学科はロシア・東欧語学科に改編され、ロシア語専攻の学生数も一〇名増え七〇名となった。

さらに九五年には、外国語学部が従来の語学科体制からより広域的な七課程に改編され、教官は各々の専門にしたがって講座に所属し、学生は入学時に専攻語を決めておくことは従来どおりで、入学後の変更も認められないが、二年時から教官の所属する講座に設けられている専攻コースに登録、三年時に正式に選択・決定することとなった。一九九九年現在、教官スタッフはつぎのとおりである。

［言語・情報講座］教授・磯谷孝、中澤英彦、助教授・石井哲士朗（ポーランド語）、講師・金指久美子（チェコ語）

［総合文化講座］教授・渡辺雅司、亀山郁夫、アレクサンドル・ドーリン、助教授・関口時正（ポーランド文学）、鈴木義一

［地域・国際講座］教授・高橋清治、小原雅俊（ポーランド文化史）、助教授・篠原琢（チェコ現代史）

これら専任スタッフ以外に、三〇名以上の非常勤講師によってきめ細かい授業がなされ、学生の知的好奇心を触発している。とりわけ専任教員全員によるオムニバス形式の講義が行われる地域基礎Ⅱは、各教官が自分の専門とする分野を、一、二年生向けに平易な言葉で語りかけることによって、スラヴ語、スラヴ文化の多様性を学生に知ってもらうことを目的に設けられた科目で、好評を博している。

大学院については、一九六六（昭和四十一）年に外国語研究科修士課程が、七七年には地域研究科修士課程が設置されていたが、九二年に至って念願の大学院地域文化研究科博士課程（前期・後期）が設置されることになる。なおロシア語専攻からは、大須賀史和（平成二年卒）が、「ベルジャーエフの宗教思想―哲学の形成と問題群」で九七年に学術博士の学位を授与されている。

ロシヤ語学科がこれまでに輩出した人材は実に多方面に及び、とてもここで触れる訳にはいかないが、戦前は外務省、商社、満鉄等に就職する者が圧倒的に多かったが、戦後の特徴としては外交官をめざす者は減り、かわってマスコミと商社に活躍の場を求める者が激増したと言えるだろう。マスコミのモスクワ特派員の大半は本学出身者であり、支局長を務めた者だけでも平野裕（毎日新聞、昭和二十八年卒）、大谷慧（朝日新聞、昭和二十九年卒）、江川昌（毎日新聞、昭和三十八年卒）、小林和男（ＮＨＫ、昭和三十八年卒）、三瓶良一（毎日新聞、昭和四十五年卒）、布施裕之（読売新聞、昭和五十四年卒）、名越健郎（時事通信、昭和五十一年卒）、吉田成之（共同通信社、昭和五十二年卒）等の名が挙がる。産経新聞の支局長だった斉藤勉（昭和四十七年卒）はソ連共産党の解体をスクープし、ボーン上田賞を受賞している。また特派員時代に身につけた知識を買われて、大学教授に転身した吉成大志（昭和二十八年卒、ＮＨＫ→立命館大学）、森本良男（昭和三十年卒、読売新聞→桃山学院大学）、中澤孝之（昭和三十六年卒、毎日新聞→県立新潟女子短大）、鈴木康雄（昭和三十九年卒、読売新聞→自治医科大学）のようなケースも増える傾向にある。

最後に戦後の外語ロシヤ語学科が生んだロシア研究者の名前を思いつくままに挙げておく。

ロシア語・言語学の分野では、佐藤純一（昭和二十九年卒。東大教授時代、長きにわたって本学で古代ロシア語とロシア語学を講じた。日本ロシア文学会会長。創価大）、千野栄一（和光大学長）、『岩波ロシア語辞典』の共編者である新田實と飯田規和（県立新潟女子短期大学長）、磯谷孝（東京外大）、大津定美（昭和三十九年卒、神戸大）、井上紘一（同年卒、北大スラヴ研究センター長）、桑野隆（昭和四十五年卒、東大）、木村崇（昭和四十六年卒、京大）、森俊一（昭和四十八年卒、上智大、一九九九年没）、原求作（昭和五十八年院修了、上智大）、神山孝夫（昭和五十六年卒、大阪外大）などがいる。

またロシア文学・思想関係では、中本信幸（昭和三十年卒、神奈川大）、左近毅（昭和三十七年卒、大阪市大）、工藤正広（昭和四十六年院修了、北大）、渡辺雅司、亀山郁夫、沼野恭子（東京外大）、坂内徳明（昭和四十八年卒、一橋大）、佐々木照央（昭和四十四年卒、埼玉大）、近藤昌夫（昭和五十九年院修了、関西大）、吉川宏人（昭和五十九年卒、福島大）、清水俊行（昭和五十九年卒、神戸市外大）などが、精力的に活躍している。

このほか名前を挙げればきりがないので省略するが、異色の存在としては、イタリア文学の第一人者である千種堅（本名川岸貞一郎、昭和二十六年卒、愛知大）、岩田宏のペンネームで詩、小説を書き、同時にロシア文学、英文学の翻訳家でマヤコフスキー研究の先駆者でもある小笠原豊樹（昭和二十八年中退）、また在学中から脚光を浴び、今や若手小説家のトップランナーともいうべき島田雅彦（昭和五十九年卒）や、同時通訳の名手で、エッセイスト、小説家として活躍中の米原万里（昭和五十年卒）などの名を挙げることができる。

付記　この原稿を執筆するにあたって、八杉貞利の業績とグレーボフの『露西亜文典』、さらに露西亜会の役割については、和久利哲一氏の原稿を使わせていただいた。また戦後の部については、原卓也氏が日本ロシア文学会で準備中の『ロシア語教育史』に寄せた原稿を参考にさせていただいた。記して感謝に代えたい。